海にいたり水晶宮に入り、龍王に見えて曰く、號山の紅孩兒、我が師父を捉へ去る、我他と交戰する時忽ち妖火を出して我勝を取ることを不得、思ふに水よく火を尅す、願はくは我他と戰ひを挑むとき、大雨を降して妖火を滅、唐僧の一難を救ひ給へ。龍王が曰く、然らば我が舍弟三海龍王を將て行き雨を降らさせ給へ。行者大いに悅び、即時に三海龍王を邀へ、共に枯松澗の上にいたり、行者衆の龍王にいひつけ、我他と交戰するを待ち、他もし火を放し出さば、我が呼ぶを聞いて一齊に雨を降せと約定し、やがて雲頭を降りて枯松澗に入り、八戒、沙僧に云々のおもむきを云ひ聞かせ、澗を跳り越え洞門にいたり、妖精、師父を返せと叫ぶ。小妖入りて斯くと報じければ、紅孩兒急に長鎗を挺げ、小妖に五輛の火車を推し出させ走せ出づる。行者喝つて曰く、賊怪早く師父を送り出して性命を全うせよ。紅孩兒笑うて曰く、唐僧は我が按酒之物とせり、汝今は救ふことを莫思け。行者怒つて鐵棒を輪して打つて蒐る。妖精も火焔鎗を擧げて戰ふこと二十餘回。されど勝ちがたきを知つて早く身を抽け、又も火を吹き出せば、五輛の車の上烟火逆起り赤焰飛騰る。行者頭を回し、一聲高く呼んで相圖をしければ、龍王水族心得て一齊に雨を降らし妖火を消さんとすれど、妖精修煉の眞火よく消す事能はず。却て火勢盛になり、火上に沖を灑ぐ

に似たり。行者大いに焦燥、避火の訣を捻び火中に跳り入り、妖精を尋れて討たんとす。紅孩兒是を見て、行者が面を哮うて一口の烟を噴かくる。行者急に頭を回し是を避くれども、烟眼中に入りて眼花撩亂見ること能はず。原來行者火を恐れずといへども只烟を怕るゝがゆゑなり。妖怪機に乘じ又一口の烟を噴きければ、今は堪りかれ、雲に縱つて敗走るにぞ、妖精また火具を收めて洞中へかへりぬ。這時行者は一身烟火に暴燥れ禁へ難くて徑に澗水に跳り入り、水をもつて身を冷すに、何ぞ知らん冷水に逼られて火氣心を攻め、三魂散じ氣胸堂に塞り、口舌冷えて倒れたり。龍王雨澤を收め高く呼んで曰く、天蓬元帥、捲簾將軍、急ぎ師兄を救へと。八戒、沙僧是を聞いて急に馬を曳いて林を走り出で、澗邊を尋ぬる處に、流下に一人の人あり。沙僧走り寄つて見るに是行者なり。大いに駭き抱き上げて見るに、蹬蹬四肢伸びず、渾身の冷かなること氷のごとし。沙僧兩眼に涙を流して曰く、可惜師兄汝億萬年不老長生の身も、縱に妖火に燒かれて中途短命の人となるかと聲を放つて哀哭す。八戒が曰く、汝先哭くこと莫れ、汝脚を扯け、我攝佛げて見ん。沙僧是に同じ、脚を拽き直して盤膝の上に坐せしむれば、八戒兩手を將つて搓熱げ七竅を一個々々押して按摩禪法す。原來行者死せしにはあらず、冷水に逼められ、氣、丹田に阻

り、聲を出すこと不能りしに、幸ひに八戒に揉擦げられ、須臾に三關を透し明堂に轉じ、孔竅を開きて一聲、師父と叫ぶ。沙僧よろこび、師兄心を慥にせよ、我們這にあり。行者眼を開き兩人を見て曰く、那龍王水族は何所にある。龍神空中に在りて曰く、小龍等茲にあり。行者が曰く、汝を遠く勞すと雖も暫て功をなさず、只請ふ是より回り去れ、後日に勞を謝すべし。龍王是を聞きて、唯々として水族を帥いて龍宮に回り去る。沙僧、行者を松林の下に坐定せ、少時の間神を定め氣を順らす。行者大いに嗟嘆して曰く、師父、妖怪の爲に困めらるゝといへども殆ど救ふに術なし。沙僧が曰く、師兄多く患ふること勿れ、我等別に計策を定めん、先何里に行きてか助力の兵を請ひきたらん。行者が曰く、那怪神通不少、もし南海の觀音菩薩を請ひ來つて事を謀らば、他を降す事あらん、然れども我が渾身酸痛みて觔斗雲に駕る事不能、奈何せんや。八戒が曰く、我去きて請ひきたらんと、即ち雲霧を起し、是に駕して南に向つて去る。是より先に紅孩兒洞中に在りて想へらく。行者火術に拉がれ、かならず別所に往きて救ひの兵を請ひきたらん、我また其裡をかゝんと、遂に洞を跳出で、空中に在りて見るに、忽ち猪八戒南に向つて走り去る。妖怪心中に思ふやう、果然八戒南に走る、是他なし、觀音を請ひきたらんためなるべしとて、急に雲

端を下り小妖を呼んで曰く、我が皮袋を把りきたれ、我一擧して八戒を瞞して袋の內に裝りきたり、蒸して汝等に喫はしめん。小怪よろこび、一個の如意皮袋を拿つて勸めければ、紅孩兒雲頭に駕し、近路を走りて八戒より先にいたり、身を搖して假觀音となり、壁巖の上に端坐して居けり。八戒は斯くとも知らず雲に乘り路を急ぐ所に、前面に觀音菩薩端坐して居しければ、獸子是を假菩薩とも知らず、雲を停め禮拜して曰く、不憶菩薩茲に居給はんとは。妖怪が曰く、汝唐僧を守りて西天には不行、茲にきたるは何事ぞ。八戒すなはち紅孩兒が三藏を捉へ、且行者も他が妖火に燒き壞られたる始末を說き、萬望菩薩、大慈悲をたれ師父の難を救ひ給へと乞ふ。妖怪が曰く、那火雲洞の主は我が故人なり、汝我が跟にきたがひ洞の裡へきたれ、我洞主に說いて唐僧を放たしめん。八戒誠ぞと心得是にきたがふ。妖怪仕すましたりとて舊路をかへりきたり、雲を下りて八戒を帥ゐ洞中に入るよと見えけるが、忽ち一聲吶喊て八戒を將つて捉き倒し、袋の內に裝入れ緊く口を束れて梁の上に細り上げ、本相を現して曰く、汝八戒獸子、我が方寸の手段に陷れり、頓て蒸し熟して小的等が下酒受用すべきぞと。八戒袋の中より罵つて曰く、汝猴寃、我を騙して腫頭天瘟目に遭はすやと袋の內にて亂跳めども逃れ去る事不能。此時行者は沙僧と俱

に林の内に坐して有りしが、一陣の腥風面を刮つて過ぐ。行者嗔嚔して曰く、這風凶多く吉少し、思ふに是猪八戒妖精に撞見したるならん、汝坐して這里に待て、我去つて打聽ひきたらん。沙僧が曰く、師兄腰疼めり、小弟去聽ひきたらん。行者が曰く、汝にては不濟事、只我に任せよと て、遂に疼を忍んで澗を跳り過ぎ、洞前にいたりて窺ふ。小妖等これを見つけ、急に入つて斯くと報ず。妖精令を傳へて曰く、行者我が火術に壞られ敢て働くこと不能、汝等去きて他を拿へきたれ。夥の小妖令を聞きて一齊に吶喊いて門を開き、都て行者を拿へ進む。行者果して疲倦れて戰ふ事不能。身をもつて潛けて變じて一個の包袱となり路傍に居たり。小妖は此手段をふらず、已に行者を見失ひ、件の包袱を取つて立かへり、大王に報ずるやう、孫行者氣力衰へ包袱を丟下てゝ逃げ走り候。妖精咲つて曰く、さも有りなめ、這包袱を掠りたりとも甚値の錢も有るまじとて、不爲意門内に丟下ておきたり。行者又毫毛を拔いて包袱となし、本身は變じて蒼蠅となりて門上に在りけるが、八戒が皮袋の裡に在つてなく聲きこゆ。又妖精六個の健將を呼んで曰く、汝等行きて老大王の所に至り、我が唐僧を捉へし趣を說き、老大王とともに蒸し喫うて千紀の壽を延べんといひ請じきたれと令す。六怪命を領けて洞外に立出づるにぞ、行者

飛出で六怪の跟に隨ひ飛び行きけり。畢竟行者何事の手段をなすか、其は下回を看て分解べし。

四二　大聖慇懃拜南海　觀音慈善縛紅孩

却說六個の妖怪門を出でゝ徑に西南を望んで走り行く。行者思へらく、他が大王と稱するは是牛魔王ならん、我すでに牛魔王を記得り、我今他が摹樣に變じて紅孩兒を欺かんと、翅を開きて飛び去り、六人の者より先に到り、身を變じて牛魔王となり、又幾根の毫毛を拔いて小怪となし、山の凹なる處に居て待ち居たり。六怪是をしらず、路を急ぎて行く所に、忽ち前面に牛魔王居たりければ大いによろこび、一齊に跪下していふやう、是は老大王に在すや、小的們は是聖嬰大王の命を受け、大王を請うて唐僧の肉を獻り、千紀の壽を延べまゐらせんためにきたり候と申しければ、行者牛魔王の趣して曰く、孩兒我を請ふとや、然らば汝等前に立ちて路を開けよ。六怪唯唯として前に立ちて路開す。ほどなく洞口にいたり、六個の妖怪かくと報じければ、紅孩兒急ぎ洞を出でゝ迎接けたり。行者拽開大步き門の裡に入り、南面に坐して當正に居たり。妖王跪き拜

して下手に就く。行者が曰く、我が兒我を請ひ來つて何事かある。妖王が曰く、孩兒昨日唐僧を捉へ得たり、他は十世修行の人なり、もし他が一塊の肉を喫ふ時は延壽千紀といへり、故に愚男一人受用せず、特に父王を請じて同く享はんとす。行者驚きし躰にて曰く、唐僧はもし孫悟空といふ者是を保けて、西天に往き經をとる人にあらずや。妖精が曰く、正に是なり。行者手を搖つて曰く、莫惹々々、那孫行者は神通廣大、變化多端、他、曾て天宮を鬧せし時、玉帝十萬の天兵を下しても猶他を捉ふること不能、汝みだりに他を喫はゞ爲よからじ、早く送り出して他に還せ。妖怪が曰く、父王何ゆゑ他を長れりとして自己の威風を滅し給ふや、那孫行者、孩兒と交戰つて兩番ともに我が三昧火に燒き敗られ、今朝またきたつて門に叫喝き、小妖門に迫立てられ、慌て行き て包袱まで丟下して逃げ走れり、故に父王を請ひきたつて唐僧の活像を見せ奉り、後、ともに蒸喫はんとし候なり。行者笑つて曰く、我が兒只三昧火有つて他に勝をとれども、他に七十二般の變化有る事を知らず。妖精が曰く、他變化を濫とするとも我またよく他を認得り、他決して我が門にきたる事能はじ。行者が曰く、すでに斯のごとくならば心易し、我唐僧の肉を喫はん、汝かれども今日は喫すべからず。妖精が曰く、何の故にて今日は喫し給はざる。行者が曰く、我斯

く老年にいたるより、汝が母我に些の善事を作さんことを勸む、我思ふに、是まで何の作善をもせず、依て些の齋戒を持てり。妖精が曰く、父王の齋、是長齋か、是月齋か。行者が曰く、長齋ならず、月齋ならず、毎月只四日なり、喚んで雷齋といふ。妖精問うて曰く、今日其四日の内に儀や。行者が曰く、三辛初六に逢ふ、今日辛酉の日に該りて齋日なり、明日他を蒸して汝と同く喫はん。妖精是を聞きて心中訝り、我が父平日に人を喫するを爲生とす、怎麼として又齋戒をすべき、此言可疑とて、事によせて座を退き、六人の健將を呼んで問ふらく、汝等者大王を那里にて乞ひきたるや。六怪が曰く、路上に居給ひしを請ひきたり候。妖精が曰く、扨こそ老大王は假的なり、汝們都て要準器械を備へて待つべし、我再び他に問ふ事あり、もし他不對時は我一聲喂ばん、其時汝等一齊に手を下せ。小怪等命を領けて用意をなす。妖精また裡面に入り、行者に對して曰く、愚男今日父王を請ふ事、一つには唐僧の肉を献じ、二つには我が出產れたる年月時日を忘れ候へば、それをも問ひ奉らん爲なり、願はくは是を知らせ給へ。行者笑つて曰く、汝が生年月日我老年に因り忘記れたり、明日家に回り、汝が母親に問うて敎へん。妖精嘲わらひ、父王平日我に八字を說いて、同天不老の壽ありといへり、怎麼とて一旦に忘れ給はん

や、かならず是假物ならんとて一聲高く喂びければ、衆怪鎗刀を舞はして行者を望んで砍つてかゝる。行者事の破れたるを見て忽ち金光と變じて洞門をのがれ出で、澗を跳つて松林にきたる。沙僧待ち居て其消息を問ふ。行者が曰く、我他を欺き師父を救はんとして事ならず、此上は我行きて觀音菩薩を乞ひきたらん。沙僧の曰く、汝腰は痛まざるや。行者の曰く、今は不疼とて、即ち觔斗雲に縱り、徑に南海にいたり、直に落伽崖上に登り、菩薩を見て側下して拜し、紅孩兒の事を說き、師父の難を救ひ給へと乞ふ。觀音宣はく他が三昧火神通廣大なり、怎麼そ早く來つて我を請はざるや。行者が曰く、弟子早くきたつて菩薩を請じ奉らんとすれど、他が三昧火に壞られ雲に駕る事不能、八戒に命じて菩薩を請ひきたらしむるに、那獸子いまだ寶山にも不到して、那妖精が菩薩の像に變じ居しに賺され、皮袋に裝られて洞中に在り、此故に遲くきたり候。觀音聞き給ひて大いに怒り、這濕妖、敢て我が姿に變ずるやとて、手中の淨瓶を海裡に投げ入れたまふ。悟空は其心を忘らず、我說話的不好に依て、菩薩怒に堪へず淨瓶を擲了て給ふ、可惜々々と心の裡に思ふ事未だ終らざるに、忽ち海中波を翻し、一個の烏龜淨み出づ。那龜淨瓶を駝うて崖に爬ひ上りて、菩薩に對し點頭する事二十四點。菩薩、行者に向ひ、汝那淨瓶を拿り

上げきたれよと命じ給ふ。行者領掌して瓶をとらんとするに、双手を掛けて猶分毫も動かす事不能。是は如何にと惘れ果て左右するを、菩薩みて微笑し給ひ這淨瓶は當時は空瓶なり、今海に拋げ下して一時一海の水を收めて裡面にあり、汝未だ海を架ける力量なき故に拿つて動かす事能はずとて、途に走り下りて右の手にて輕々と提起げ、左の掌に乘せ給へば、那龜は點々いて海中に沈み去る。菩薩曰く、我が此瓶中の甘露水、那龍王の私雨と同じからず、よく那妖精が三昧火を滅す、汝に與へて師父を救はせんと要すれども、汝今動かす事不能、今我、汝と同じく去きて唐僧を救ふべし。行者磕頭いて恩を謝す。菩薩、惠岸に分付け、上界に行きて汝が父王の三十六把の天罡刀を借りきたれと命じ給へば、惠岸命を領けて去り夬して回轉り、天罡刀を菩薩に捧げ奉る。菩薩是を手にとり拋げ下して咒語を念じ給へば、那多の刀化して一座の千葉蓮臺となりけり。菩薩身を縱して中間に端坐し給ひ、祥雲を起し普陀岩を離れて、行者、惠岸とともに須刻の間に號山につき給ふ。菩薩淨瓶の口を拔き傾けて喇々と水を出し給ふ。其音雷のごとし。又悟空を呼んで他が手を出させ、楊柳の枝を甘露水に蘸し、一個の迷の字を書し、行者に敎へて曰く、汝這拳を握着め往きて妖精と戰ひ、僞り敗けて我が面前へ引ききたれ、他もし一度汝を追は

ば掌を開きて見せよ、那必然住ることを忘れて追ひきたるべしと。行者命を領けて徑に洞口にいたり、棒を揚げて洞門を丁々と打破る。小妖駭き走り入りて斯くと報じければ、妖王大いに怒り、火焔鎗を挺げて洞を跳り出で行者を見て罵つて曰く、這猴猿兄禮なり、數回の敗績にも懲りず、尚きたつて我が大門を破るや。行者曰く、汝早く我が師父を送り出さば再度門を破らじ。妖怪大きに怒り、長鎗を綽つて刺いて覓る。行者棒を擧げて相迎へ、戰ふこと四五合にして哩り敗けて逃走る。妖怪立住り、我何ぞ汝に瞞され長追すべき、我先歸つて唐僧を剛洗して後汝を捉ふべし。行者他を哩いて曰く、好兒天看着儞哩儞來。那怪、行者に哩られ嗔怒り、一聲喝して面前に到り、鎗を上げて又刺いてかゝる。行者再び戰ふこと五六回、引返して洗げさま拳を開きて妖怪を招きければ、那冤忽ち迷亂せられ、我を忘れて追ひ走る。行者は妖樹を釣出して、早く身を菩薩の金光の影に隱しぬ。妖怪猶追ひ進みて睜眼に菩薩を見て罵つて曰く、汝孫行者を扶けんとてきたれるか、そも如何なる菩薩ぞ。觀音是を聞し召せども一言も答へ給はず、自若として端坐し給ふ。妖怪大いに怒り、劈心に一鎗を擧げて刺し奉るに、菩薩早く金光と變じて九霄空內に走り昇り、行者、惠岸とともに空中に在りて是を見給ふ。那妖笑つて曰く、猴猴我と幾度

交戰ふとも勝つ事能はず、又去つて膿包菩薩を請ひきたるといへども、我が一鎗を喫して影も形もなく逃失せたり、さかのみならず蓮臺まで舍下きたる可笑さよ、且我上つて坐せんとて、自ら菩薩を學んで手を盤め脚を盤げて蓮臺の中間に坐す。其時菩薩楊柳の枝を持つて指招き給へば、今迄花彩祥光の千葉蓮臺、忽然として三十六把の天罡刀となり、妖怪が兩脚を穿ち血流れて住らず。妖冤大いにおどろき、牙を咬んで疼痛を忍へ、火焔鎗を舍り、刀を將つて搜り捨てんとす。菩薩また咒語を念へ給へば、那刀、脚を貫きしまゝ釣針のごとく曲つて毬く事能はず。茲に於てさしもの惡怪疼痛禁じがたく、哀み叫びて曰く、菩薩免させ給へ、我眼有れども瞳なく、廣大の法力を知らず多く无禮をなせり、願はくは垂慈を乞ひ奉る、我が性命をだに饒し給はゞ再び惡業をなさず、法門の戒行を保ち候はんといひければ、菩薩行者とともに九霄を下りて曰はく、汝今の言に背くまじきか。妖怪泪を流し、命だに助け給はゞ長く徒弟となり候はん。觀音其時柳葉を將つて變じて剃頭刀となし、近く進んで妖怪が項の髮を分け剃つて、只三個の搭を留下し挽起んで三個の窩角揪兒となして宣はく、汝今より長く惡念を斷つて我に奉侍せよ、今より汝を善財童子となすべし。妖怪是を聞きて大いによろこび、只望むらくは疼痛を饒し給へ。菩薩點首き給ひ、手を

以て指ざし一聲呼び給へば、天罡刀すべて脱け落ち、童子が身軀一點の痕もあらず。菩薩、天罡刀を拾ひ收めて悪岸に命じ天宮へ送り返し給ふ。童子は野性いまだ定らず、腿脚の痕なく疼止みたるに就ておもへらく、他眞の法力にはあらじ、只一個の妖術のみ、何程の事あらんと、また鎗をとつて菩薩を劈ひ刺きかゝる。行者大いに怒り、鐵棒を上げて擊たんとするを、菩薩早く制し給ひ、一個の箍兒を將つて童子を望み擲げ給へば、忽ち變じて五個の箍兒となり、一個は童子が頭に入り、四個は童子が四肢に入る。童子おどろき、是を捜り捨てんとすれども協はず。急に呪語を念じ三昧火を吹かんとすれども、前に菩薩、淨瓶の水を出し散し給へば、三昧火生ずる事能はず。童子も惘れ果て、茫然たるに、菩薩徐に訣呪念呪語へ給へば、童子が五體疼痛する事甚くがごとくなれば、大いに慌て、耳を搓り腮を揉み踵を攢めて打滾び、饒し給へ〳〵と哀み叫びてぞ悶えける。

四三　黒河妖孽擒僧去　西洋龍子捉鼉回

此時觀音菩薩、童子が悶亂するを耳にも入け給はず、行者に示して宣はく、汝是を見よ、昔て我

佛如來我に金、緊、禁、三個の箍兒を授け給ふ、緊箍兒は先に汝に與へ、禁箍兒は守山大神を收む、殘りし金箍兒は未だ授くべき者なかりしに、今這童子に授けたりと說き給ひ、又童子に向ひ、汝猶も惡念を斷たざるやいかにと責め給ふ。童子困しみ泣いて曰く、菩薩饒し給へ、我此後は決して惡心を起し候まじ。菩薩聞き給ひ、御手に捻び給ひし訣をはらひ給へば、忽ち苦痛を忘れたり。童子青きいきを吐き、手足の金箍を除き去てんとすれども、只一般の肉根を生じたれば除く事能はず。行者笑つて曰く、汝菩薩の戒行を受け、奉侍するとも何の役にも立つまじと嘲るにぞ、童子また煩惱心を焦し、鎗をとつて行者を刺さんとす。菩薩早く楊柳の枝を擧げて他が鎗を打ち落し、一聲、合掌せよと宣へば、童子我ならず一雙の手を合せ胸に當てしが、再び開かんとするに更に開く事能はず。茲において童子、菩薩の不可思議法力を感嘆し、頭を低れて心誠に正果に皈しけり。末世に至りても觀音菩薩の傍に侍立する善財童子とは、這紅孩兒が事なりけり。斯くて菩薩行者に分付け、汝早く洞中に往きて師父、八戒を救ひ西天に赴けよと命じ給ひ、躬も善財童子を引領れ、祥雲に駕つて普陀洛山へぞかへり給ひける。却說沙僧は、久しく林間に有りて行者が音信を待てども曾てかへりきたらざれば、又奈何なる難にか遭ふらんと安き心もなかりしに、忽ち雲頭よ

り孫行者歡喜みて下りきたる。沙僧むかへて其故を問ふ。行者一々說しければ、沙僧大いによろこび、兩個澗を跳り過ぎ火雲洞に打入り、群妖を拂ひ盡して三藏八戒を解放し、觀音を請うて妖魔を收めし事を一遍說きければ、三藏感泪にむせて南方を禮拜す。沙僧は洞內にて齋飯を安排へ、師徒飽くまで喫し、夫より四衆、號山を立出で、西を志し行くこと數月におよぶ。然るに一流の大河に行きかゝる。其水黑くして水勢箭を射るが如し。三藏馬をとゞめ徒弟に向ひ、這川何によつてか如斯く黑きやと問ふ。八戒が曰く、是家猴の靛缸するならん。沙僧が曰く、不然、是源の里に筆墨を洗ふならん。行者腹を立て、汝等亂道をいふ事を休めて只師父を渡す工夫をせよ。三藏が曰く、這河多少の寬さありや。八戒が曰く、凡十里の寬さあらん。三藏が曰く、汝等三人計較して誰にても我を馱うてわたれ。行者が曰く、八戒、師父を馱へ。八戒が曰く、不好々々、我師父を馱うて雲に駕らば三尺も地を放る、事を不得、常に人のいへる事あり、凡人の重さ傾山のごとしと、今師父を馱うて往かんとせば、我も轉連に成つて水に墜ち去らんと。師徒是彼商議して居る所に、只看る、一個上流より小船に掉下してきたる者あり。三藏よろこび、幸ひかな船きたれゝ、呼んで乘りわたらん事を懇め。沙僧手を擧げ、掉船的來つて我等をわたし給へ、深く恩を謝すべし

と呼ぶ。艄公是を聞いて船を岸邊に近着けて曰く、和尙們我が這船小くして多くの人乘る事能はじ、各々は多人數なれば、此船にてわたり給ふ事能はじ。三藏此船を見るに一段の木頭を刻んで中間に一個の槍口あり、幾に兩個の人を乘すべし。三藏徒弟と商議し、奈何がせんといふに、沙僧が曰く、兩個づゝ乘つて二度にわたらば安からん、八戒まづ師父を扶けて船に乘り先へわたれ、我は師兄と二番の船にのりて渡らん。八戒然りとして、三藏を馬より下し船に扶けのせ、已も乘り移れば、艄公撐開擧棹て、稍中流にいたる處、忽ち一陣の怪風吹き出し、浪を捲き波を飜して遮天迷日十分利害。あはやと見るうちに艄公はいふに及ばず、唐僧、八戒、船とともに浪に捲きこまれ、影も形もなく成り行きけり。行者、沙僧は岸に在りて、大いに驚き、慌てけれども方便なし。行者、沙僧に向ひ、我思ふに那艄公初めより不正の氣あり、他風を弄ひて師父を水中へ把り去りしならずやといふ。沙僧が曰く、師兄茲に馬と行李を守りて待て、我水中に入りて尋ねきたらんと。遂に福形をぬぎすて寶杖を提げて、水路を開き進み走る處に、只見る一座の亭臺有り。門外に八個の大字あり。是衡陽峪黑水河神府と鐫り付けたり。然るに裡面に說話する聲聞ゆ。沙僧是を聞くに、他が曰く、多年辛苦せしに今日方によく這和尙を捉へ得たり。乃ち是十世修行の好人に

で、他が一塊の肉を喫ふときは便ち長生不老なりと聞けり、小的等早く鐵籠を把つて擡ちきたれ、唐僧を鐵籠の上にて蒸熟し、舅姑を請ひきたつて他とともに受用して壽を曝べんと。沙僧是を聞いて大いに怒り、寶杖を擊げて門を亂打いて曰く、濁物性命を惜まば快く我が師父を送り出しきたれ。小妖驚き斯くと報じければ、妖怪急に一根の竹節鋼鞭を拿つて門に走り出で、喝して曰く、汝何者なれば我が門にきたつて亂打するや。沙僧の曰く、汝濁怪、前に玄虛を弄ひ我が師父を將つて攝め去れり、早く送りかへさば汝が性命を饒さん。那怪呵々とわらひ、這和尚の不知死活、唐僧は拿へて蒸熟にし、客を請うてともに下酒にせんとす、汝も又拿へて一發に喫はんや。沙僧暴燥し、寶杖を輪して打つてかゝる。那怪物も鋼鞭を擧げて相迎へ、交戰ふこと三十餘合。沙僧暗に思へらく、這怪是我が敵手にあらず、迚も勝つ事を得じ、只偽つて他を引出し、哥々を呼んで打たしめんと、虛り丟了て敗走る。那怪嘲わらひ、汝去らば去れ、我敢て追はじ、客を請うて汝が師父を蒸し喫はんとて、早く門内に引入たり。沙僧力なく氣呼々々いひて水を跳り出で、行者を見て前事を說しければ、行者が曰く、不知他は何の怪にて、那の二人の舅は又何の怪ぞや、といふ事未だ不了ざるに、只見る灣裡より一個の老翁走り出で、行者が前に

跪下づいて磕頭く。行者が曰く、汝は何者ぞ。老翁泪を流して曰く、我は這河の主なり、那妖孽年五月西洋より這大湖にきたり、すなはち小神と交鬪ふ、小神年老いて他に敵する事不能、終に他が爲に我が黑水神府を奪はれ、奈何ともすること不能、徑に海内に往きて訴ふるに、他原來西洋龍王の舅なるが故に不取敢、却つて他に讓り與へて住ましむ、今聞く大聖此にいたる、特にきたつて願ひ奉る、望むらくは我が爲に寃を報じ給へ。行者が曰く、然らば西洋龍王罪有り、沙僧は茲に待て、我海中に入りて先龍王を捉へきたり、他に敎へて此怪物を擒へん。河伯深く大恩を感ず。行者すなはち雲に駕し、徑に西洋大海にいたり、避水の訣をむすび波浪を開いて往く處に、忽ち一個の黑魚精に出逢うたり。他一個の請書匣兒を捧げたれり。行者耳裡より鐵棒を引き出して一打に打ち殺し、匣兒を開き見るに裡に一張の簡帖あり。上に愚甥敎潔頓首啓上、二舅敖老臺下と書きたり。すなはち開封して見れば、今唐僧を獲へ得たり、實に世間に罕物なり、甥あへて自ら不用、伏して思ふ、舅爺聖誕邂逅にあり、因て筵席を設け、あらかじめ千秋を祝せんとす、萬望車駕速に臨行を願ふと書したり。行者打わらひ、這厮供狀を我に遞與たりと袖了に帖子て行く處に、早く巡水夜叉望み見て急に宮門に入つて斯くと報ず。龍王敖順

忙はしく出迎へ、問うて曰く、大聖何のため此に來給へる。行者が曰く、特きて汝に請つて酒を喫まんためなり、先汝に見する物ありと、袖中より簡帖を取出し龍王に遞與す。龍王是を見て魂飛魄散し、慌忙て跪下いて曰く、大聖まづ怒を休め給へ、那斷は是舍妹第九人目の兒、かの雨を錯行りたる罪(此事初編に有り)によつて魏徵に斬られたる者の遺胄の舍甥なり、故に他を黑水河に遣はし、性を養ひ眞を修せしむ、然るに不期もかゝる惡孽をなす、小龍すなはち人を差して他をとらへ罪を謝せんと、急に太子摩昂を喚んで五百の壯兵を附屬し、汝往いて小龍を捉へきたれと命じければ、太子命を領掌す。茲において行者、龍王に別れて摩昂とゝもに兵を領し、黑水河の水府にいたる。摩昂まづ水族をいれて妖怪に面會せん事を請ふ。那怪心疑うて曰く、我黑魚精に投帖を持たし差して二舅を請ふに、怎麼きたらず、却つて表兄のきたるや、是かならず仔細あらめと鋼鞭を帶して門に立出で、表兄遠くきたるは何事の用ぞと呼はる。摩昂が曰く、汝舅を請うて何事をなすや。妖怪が曰く、小弟多く舅爺の恩を蒙り、此に住む事を得るといへども、露ばかりの孝順をもなさず、昨日幸に唐僧を捉へ得たり、他は十世修行の元體、もし他が肉を喫ふ者は壽しと聞く、故に舅爺を請うて蒸し喫はんためなり。摩昂聞いて喝つて曰く、汝

不知死活、今いふ唐僧の大徒弟に齊天大聖といふ人有るを知らずや、五百年前天宮を鬧せし桀傑なり、今は正果に歸して孫行者といふ、他が神通變化究りなし、汝早く唐僧、八戒を饒し、厚く陪禮せば幸にして性命を全うする事を得ん、もし迷ひをとりて半時にても遲滯らば忽ち害はれん。妖怪聞いて大いに怒り、我は是汝と嫡親姑表なるに、汝却つて猴の左袒こそ安かられ、よし汝は他を恐るゝとも我は少も恐れず、他もしきたつて我とよく三合を鬪はゞ唐僧を還し得させん、もし鬪ふ事不能ば、我一連に他をも捉へて一齊に蒸し喫はん。摩昂罵つて曰く、這潑邪兀禮なり、我今父王の命を奉けて特汝を捉へに向ひたりとて、遂に兩個英雄を逞うし戰ふ事二十餘合。太子三稜簡を閃して妖怪が右の臂を一簡に打ち下すにぞ、妖怪堪らず地に跌け倒れたり。其時海兵一齊に擁り、繩を將て兩手を背に綁め、鐵索を將て琵琶骨を穿ち、岸に引上りて行者が前に引居ゑけり。行者喝つて曰く、汝が舅爺汝を此に在らせて性を養ひ身を存せしむるに、其令旨に不遵、怎麼水神の宅を强占ひ、勢ひに乘じて惡行をなし、我が師父、師弟を捉ふるはつみ輕からず、我が此五棍の棒を喫へと睨め付けゝれば、妖怪、行者が勢ひに呑まれ頭を叩いて罪を謝し、大聖願はくは小龍が綁を饒し給へ、我河中にいたり唐僧師弟を送りきたらん。摩昂が曰く、大聖

他を放し給ふな、水府へ回らば又惡念を生じ候はん。沙僧が曰く、我他が水府を忘れり、師父を迎へきたらんと、河伯と打連れ水中に跳り入つて徑に水府にいたり、小妖を打退け、唐僧、八戒が綑を解き去り水面に背ひ出づる。八戒那妖怪が綑められて岸に在るを見、急に鈀を上げて擊たんとす。行者其手をとゞめて曰く、他罪ありといへども敖家賢父子の情默止がたし、汝他が罪を免せ。摩昂が曰く、今既に師父、師弟を救ひ得たれば、小龍は這斷を引連れかへり候はん、大聖は他が死罪を饒し給へども、家父は決して罪を宥し候まじ。行者が曰く、如此くなれば汝他を領いてかへれ、令尊に拜上して深く恩を謝せよと申しければ、摩昂唯々として那妖を引立て、徑に西洋大海にかへりぬ。扨河伯は水府を尊ひかへしたるをよろこび、三藏師弟に深く恩を謝し、小神道を開き候はんとて、すなはち法術を起し、水を阻め、上流をせきとめければ、須臾の間に下流の水乾きつきて一大路を開きたり。三藏師徒大いによろこび、西岸に行着き後をかへり見れば、已に河伯の像はなく、上流の水漲り流れて以前の大河とぞなりにける。

四四　法身元運逢車力　心正妖邪度背關

話説三藏師弟黑水河を過ぎて行く事多時にして、また春の天氣に値ひ、師徒路上の景色を遊觀し笑ひ語りて行く處に、忽ち數萬人の吶喊聲聞ゆ。三藏害怕れて曰く、悟空那响聲は那里なりや。行者が曰く、老孫見とゞけ候はんと、身を動して空中にあがり睜眼に是を見るに、一座の城地あり。那城門の外に一座の沙灘あり。數多の僧人攢簇りて車を扯く。原來是一齊に着力せ打號して齊しく喊ぶ聲なり。行者雲頭を下り往きて見るに、那車に裝みたるはすべて磚瓦、木植なり。又見る一道の夾脊小路有りて兩座の大關を居ゑたり。關下の路すべて直立、壁を立てたるごとく、崖陡しくして那車いかにも引き上りがたく見ゆ。然るに城門の裡より搖々擺りて兩個の道士出で來る。數多の僧徒、道士のきたるを見て心驚駭戰きて、力を加倍車を拽く。行者此體を見て心におもへらく、我聞く、西方の路上、一個の道士を敬ひ僧を滅す國ありと云へり、必竟此里ならむ、我行きて他に問はんと。途に身を搖して變じて遊方雲水的となり、漁鼓を敲き口に道情を唱へ、兩個の道士が前にいたり、身を躬めて曰く、道長に問ひ申す事あり、這城中那條の街に出でゝか貧道些の齋を請うて喫する事を得ん。道士笑つて曰く、汝這野僧、不是ことをいふことなかれ、汝遠國よりきたりて我が這里の事をしらずや。行者が曰く、貧道何の仔細を

も志らず、願はくは說き敎へ給へ。道士が曰く、此城の名を車遲國といふ、國王我們と親みあり、因に說き示さん、二十年前這里亢旱に遭ふ、國王沐浴し香を焚き、天を拜して雨を求む、正に倒懸の所に臨み、忽ち天より三個の仙長を降し生靈を救ふ、我が家の師父すなはち是なり、大師を號けて虎力大仙といひ、二師を羊力大仙といひ、三師を鹿力大仙といふ、皆よく風を呼び雨を呼び、石を點じて金となす、是國王の相敬ふ所以なり。行者曰く、道長の師父如斯き手段あり、貧道一面見る事を得べけんや。道士が曰く、是最安し、我們公事を把了いて、すなはち汝を引いて師父に見えしむべし。行者が曰く、道長何の公事かある。道士手をもつて那沙灘上の僧人を指定して曰く、他が車に裝む處の的我家生活なり、先一應改めきたらん。行者又其ゆゑを問ふ。道士が曰く、當年雨を求むるの時、國王僧人を請うて佛を拜し雨を祈らしむるに、那和尙等空經を念んで不濟事、後來我が師父一到に雨を喚び風を呼び、萬民の塗炭を拔濟了、其時朝廷惱了て那和尙を无用の者なりとし、他が門を折了追了ひ、他が度牒御賜を我們に賜ふ、因て後邊の住房未完なるゆゑに、這和尙們に分付け、磚瓦、木植等を拽き運ばせ房宇の起蓋をなす、只恐は他が徒食閑ることを躲嬾ひ、我們兩們を著けて査めしむる所なり。行者說を聞き了り

て泪をながし、貧道一個の叔父あり、出家剃髮して僧となり這幾年家にかへらず、我思ふに祖上の一派なれば、特きたつて尋ねれども未知、此衆僧の中にあらんも知りがたし、祈はくば我往きて査めん。道士が曰く、罷々、我們兩個ばらく坐下ん、汝沙灘に去きて我に替つて一々查只點へて、五百の名數あらばすなはちよし、中にもし汝が令叔あらば、我等道中の情をもつて他を放ち去らしめん。行者恩を謝して道士に別れ、徑に沙灘に往き、雙闕を過ぎて夾脊を下るに、僧人一齊に跪いて頭を磕く。行者が曰く、我は監工にあらず、親的を尋ねにきたる次なり。衆僧聞いて個々頭を出し面を露して、あはれ擡り出されて遁れまほしき面色なり。行者大口開いて呵々とわらひ、汝等衆不長俊、怎麼不去して那道士の傭工に與るや。衆僧等が曰く、是には深き利害あり、這里の國王三個の道士を信仰し、我等を滅して寺を折了ち、度牒を追拂ひ、那仙長に賜ふ。行者が曰く、那道士何の巧術有つてか國王を誘動すや。衆僧が曰く、會燒して丹を煉り、石を點じて金となし、或は雨を呼び或は風を呼ぶ、今觀裡に在りて晝夜看經み、君王の萬年不老を祈る、是すなはち君心を感動せしむる所以なり。行者が曰く、如此くならば汝們何として不走や。衆僧が曰く、敢て走りがたし、其ゆゑは那道士君王に奏し、我們が畵了形圖を把

つて四下に張り掛け、官職ある者一個の和尚を拿へ得る時は官三級を陞せ、无官の者一個の和尚を拿へ得る時は賞金五十兩を賜ふ、此故に去脱るゝ事能はず。行者が曰く、既に如斯くならば汝們死了罷。衆僧が曰く、死的儘多し、我徒捉へられしもの二千餘衆ありしに、艱難苦楚に堪へかれ死するもの六七百人、其後また死するもの七八百人、只剩了れて我們五百個不得死、日食一度稀に粥を食ひて夜は沙灘に臥して纔に眼を合すのみ、然るに一夜神人有りて我徒に勸め說いて曰く、汝等只管に死を要むることなかれ、ちばらく苦楚を捉へよ、東土より西天に往きて經をとる羅漢の大徒弟齊天大聖孫悟空といふ者あり、もつばら不平の事を收む、遠からずして他這里へきたり、道士を滅し汝們をすくひ、再度沙門禪教を國に弘むる時を得べしと告げて行方なく失せたり、因て我徒多くの憂苦を忍び、もつばら齊天大聖のきたり救はんことを望むこと、赤子の母を請ふが如しとさめ〴〵と泣きてぞ語りける。

四五　三清觀大聖留名　車遲國猴王顯法

話說孫行者は、衆僧の話を聞いて、別を告げて徑に城門の口に來る。道士が曰く、爾が令叔那

裡に有りしや否や。行者が曰く、在り、那五百人皆我が叔父なり、儞五百人をすべて放ち免せ。道士大いに惱れて曰く、おもふに儞些瘋病と見えたり、心を鎭めて亂說をいふ事なかれ、那和尚們は國王の命にて、若一人を放つだにも師父に遞了を得けて、疾病につき補死狀といひ立て、纔に放す事を得べし、怎麼して總て放す事を得ん。行者が曰く、儞ちかと放すまじきか。道士が曰く、斷然放さじ。行者大いに怒り、耳朶の內より鐵棍を取出し、一晃ふつて道士の頭上より打ち下せば、只一棍に二人とも頭を碎かれ斃死したり。灘上の僧徒是を臨み見て車を丟りて進み來り、道へかけ上り惱れはて、不好々々、皇親を打ち殺せり、他が師父必ず我們を捉へ連坐に謀殺せん、是は怎了々々、只進み行きて此事を訟へ、わが命を助かるには不如と慌惑ふ。行者が曰く、儞們噪する事勿れ、我は是雲水全眞ならず、實は唐僧の大徒弟齊天大聖孫行者なり、特來つて儞們を救はんとす。衆僧信ぜずして曰く、不是々々、我們那老爺を認得れり。行者訝りて曰く、我曾て儞們に不會、如何して認得れるや。僧徒が曰く、我們夢に一個の神將を見る、他自ら曰く、我は太白金星なり、儞們に那大聖の模樣を告げちらせん、那の孫行者は磕額、金睛、圓頭、毛臉にて、貌雷公のごとく、金箍棒を使ひ、專ら人の災害を救ふと告げ畢つて夢覺

めたり。行者聞いて大いにわらひ、然らば我が實の模樣を見せんと遂に本相を現はしければ、衆僧見て倒身し手を合せ拜みて曰く、大聖我們を憐み恨を雪ぎ災を消して給はれと泣き訟ふ。行者點首き、儞們大勢ちばらく散じて我が手足の邊に居る事勿れ、我明日國王に見えて那道士們を滅亡させん。衆僧が曰く、我等遠く逃げ走らば、恐らくは人に捉へられ、反つて禍を惹き出ださん。行者が曰く、然らば我儞等に護身法を與へんと、逐に毫毛を一把抜いて一人に各々一根を分け與へ、扨教へて曰く、儞等此毛を無名指の甲の裡に藏し、拳を捻つて只管に路を走れ、もし人有りて捉へんとする時、即ち拳を放き一聲大聖と呼べ、然らば到りて儞們を護らん。衆僧聞いて試に那毛を甲に隱し、手を啓いて齊天大聖と一聲呼ぶに、只看る、一人の行者面前に現れ出で、手に鐵棒を執りて站みたるは、千軍万馬も近付きがたく見ゆ。又拳を捻れば忽ち行者の像手中に收りぬ。衆僧此奇特を見て悅びいさみ、拜謝して各々一齊に逃げ去らんとす。行者暫しと呼び留めて曰く、儞們遠く遁るべからず、我那道士を滅さば城外に榜をいださん、其時回り來て我が毫毛を還せ。衆僧奉手ひ四方に散じ去りにけり。扨說唐僧は、行者が久しく歸り來らざれば、八戒、沙僧と俱に城邊にきたり見るに、行者いまだ散り殘りたる和尚數十個の裡にありて、三藏のきたるを見、急に僧徒

を引いて師父を迎へ、上項條を說しければ、三藏半は悅び半は恐れ、此事如何あらんと危めり。那和尚等が曰く、活佛放心し給へ、明日早朝大聖かならず處置あらん、我們は是城裡の勅建知淵寺の僧人なり、我が寺は先王大祖の御造立故に、いまだ曾て打毀たず、老師父を請うて寺內に安寢せまゐらせん。三藏聞いて大いに悅び、馬を下りて城裡に入り、不多時三門に至り、正殿に上りて三藏佛前に禮拜す。此間に衆僧去つて齋を安排へ來りぬ。師徒十分に喫し畢り方丈に入りて安寢しけり。斯くて時二更に及ぶ比行者ふと眼を覺すに吹打聞えければ、急に衣服を穿了し跳つて雲中に上り是を見るに、是三淸觀に那三個の道士法衣を披了、醮星し、兩邊には七八百の徒弟寄り集り、皷を司し鐘を司し、香を侍きて表白するなり。行者看了りて雲端を按落り悟淨を呼ぶにぞ、沙僧覺め來つて曰く、哥々還曾睡らざるや。行者が曰く、儞起ききたれ、一個の受用をさせん、這城裡に一座の三淸觀あり、觀裡の修醮の殿上に許多の供養饅頭あり、その大きさ斗許づゝ、又五六十斤の燒餅もあり、觀物無數菓品新鮮なり、我と儞と和にて受用せん。八戒睡夢裡に是を聞き覺め來つて曰く、哥々何ゆゑ我をも帶挈き給はざるや。行者日語し、儞喧しくいふ事なかれ、師父の睡を驚かさば妨あらん、只我に着きてきたれといふ。兩個悅びて

衣服を套上、悄々門を出で、雲に駕りて徑に三清觀にいたり見るに、燈を點し連れ星のごとくなれば、八戒既に入らんとするを、行者扯住め、且く忙事を休めよ、我方便あり、他等が退散するを待つて下りんと、念訣念呪して巽地の方に向ひ、一口の氣を吸ひ吹き下せば、忽ち一陣の狂風となりて、三清殿上に吹きいたり、數萬の燈燭を一齊に吹消したり。衆の道士大いに心おどろき膽戰を見て、虎力大仙が曰く、徒弟且く散ぜよ、この陣風凶多く、吉少し、明早餘りの經を念じて數を補はんと。是によりて衆道士各々散じ回りぬ。行者仕遂したりと八戒、沙僧を引いて殿上に入るに、八戒獸子早く燒餅を拿つて張口喫ふ。行者が曰く、上座に坐したるは是元始天尊、靈寶道君、太上老君の木像なり、我們三人總て這すがたに變じて安穩と喫はん。八戒聞いて忽ち高臺に爬ひ上り、老君の像を把つて拱下し、己太上老君に變ずれば、行者は變じて元始天尊となり、沙僧は靈寶道君となり、各々原像をとつて推下す。行者が曰く、這聖像を茲に置き、道士倘來つて是を見ば巧謀あらはれん、八戒行きて門口の大池の裡へ丟り込みきたれ。獸子心得跳り下りて、三個の像を把つて肩に膊上け、池水へ抛込んで殿上へはしり回り、依舊老君に變じ、三個坐して供物をことゞく情受用ふ。行者はいまだ幾干も喫はざるに、那二個は風の雲を

捲くがごとく、悉く喫ひ盡しぬ。茲に東廊下に一個の小道士潛み居たりしが、鈴を殿上に丟れたる事を思ひ出し、殿上へ探りきたり、手鈴を探し取り、頭を傾けて聞くに、三聖の像に呼吸の聲あり。小道士仰天して害怕き、急に走り出でしが、一個の荔の核か踏みすべりて撲的と跌び、一聲嗤的と響きて鈴を粉碎とす。八戒忍へかれて呵々とわらふにぞ、小道士益々謊得て一步一跌撞到して方丈の外へ逃げ出でゝ叫んで曰く、師公きたり給へ〳〵と。三個の老道士即ち門を開いて、何事やらんと問ふ。小道士戰々兢々曰く、小弟殿上に鈴を忘れたるに依り、尋ねきたらんとする時、忽ち人有りて呵々とわらひ候、更に何者なる事を志らず候へども、此旨達し候と顏色如桑いひければ、老道士急に令を傳へて衆道士を呼び起し、掌燈を拿つて正殿に進み入る。行者以下三個は是を見て、就板着臉ごとく動身もせず坐し居たり。時に虎力大仙燈を點じ、前後を照し見て曰く、歹人一個も有る事なし、然るに何者か此供献を把つて總喫ひ了ひたるや。鹿力大仙が曰く、小弟おもふに是我徒虛心に誦經する故に、天尊聖駕を降臨して這供養を受用し給ひしならん。羊力大仙が曰く、既に如此くならば仙駕未だ歸り給ふまじ、我們拜して些の金丹水を求めて朝廷に進めば、是我們が大功ならん。虎力大仙聞きて曰く、此說的是なり、徒弟們急

に樂を奏せよと令して面白く囃さしめ、三個の道士は法衣を披して座を揚げつゝ舞踏り、拜伏して、願はくは天尊些の金丹聖水をたまへ、朝廷に進め獻らんと一心不亂に祈るを見て、八戒、行者に耳語いて曰く、我們供物を受用せしは美かりけれど、這般なる祈を受けては答應へのしやうなし、何としてかよからん。行者暗に喝つて曰く、爾何事をもいふ事なかれ、たゞ我に憑せよとて、聲を躍くして曰く、仙翼且く拜祝する事を休めよ、我們蟠桃會より直にきたりたれば曾て金丹聖水をもたず、後日に再びきたりて垂し賜へん。那大小の道士木像の説出したるを聞きて大いに悅び、活天尊臨降り給ふ、かならず放す事勿れ、好歹に長生の法兒を求めんとそゝり立つ。鹿力大仙また拜して曰く、是非にすこしの聖水を留めて弟子們にあたへ、延齡長生ならしめ給へと祈りて休まず。行者が曰く、然らば力なし、我些の聖水を興へん、さりながら恐らくは汝等が苗裔を滅すにいたるべし。衆の道士頭を叩いて曰く、子孫の事は力なし、弟子等斯くまで恭敬ふ心を念ひやりて些の聖水をたまへ、廣く道德を宣べ國王に奏して普く玄門を敬ひ申すべし。行者が曰く、此上は些の聖水を興へん、器物をとりきたれ。衆道士大いに悅び、稽首謝恩し、那三個の老道士、或は大缸を擡ち或は砂盆を取り、或は花瓶の花を捨て移して三人の前に置く。行者が曰く、汝等ことゞく出で去つて格子を掩へ、少しにても覗き見て天機をもらす者あらば、眼前に天罰を得べしと怕しければ、衆道敬んで命に順ひ、一齊に出で退きけり。其時行者立起り、虎の皮の裙を掀着り、一個の花瓶へ臊溺を垂れ込みけるにぞ、八戒も同じく犢鼻褌を捲りて砂盆の中へ溺了む。沙僧も缸の中へ溺を撒了ひ依舊く坐し居たり。行者呼んで曰く、仙翼きたつて聖水を領とれ。其時衆道士格子を推ひらき、頭を叩き恩を謝し、缸、瓶、砂盆を總て擡び出して一處に集め、徒弟に命じて鍾子を取りきたらせ、虎力大仙先一鍾汲んで一口呷下、只管唇を抹め嘴を努めて居たりければ、鹿力仙が曰く、師兄好喫きや否や。虎力が曰く、甚だ不好、些酬醇き味あり。羊力また一口呷ひて曰く、些猪の溺のごとく臊氣あり。行者是を聞きて、今は事露れん事を察し、悟淨、八戒に曰く、一個の手段を弄ひて箇名を留めんと、忽ち大に叫んで曰く、汝等たしかに聞け、是は誠の天尊ならず、大唐の僧宣旨を奉り西天におもむく路上當國にきたりしに、おもはず供養を喫ひ嘻々、今汝等が喫ひしは甚麼の聖水とか思ふ、是我が一溺の尿なりと呼はり、三個ひとしく呵々とわらふ。道士等大きに怒り、一齊に叉鈀、掃箒を動かし、瓦塊石頭を投付け、細捉らんとぞ鬪きける。行者、八戒、沙僧は早く殿外に

闖ひ出で、雲に跳駕つて徑に智淵寺へ回り、敢て師父にも告げずまた眠に就きけり。扨次の日早朝に三藏起き出で、徒弟を呼び、我關文を換へきたらん、汝等も來れよと命じければ、三人ともに師父の跡に隨ひ行く。三藏徑に五鳳樓に至り、黄門官に對し禮をなして姓名を報じ、轉奏を憑みければ、黄門官則ち是を奏す。國王奏を聞いて曰く、這和尚死を要めてたづれ來れりとて、門を開きて唐僧等を宣し入る。師徒階の前に排列び、關文を國王に呈す。其折から、黄門官きたつて奏して曰く、三位の國師來れりと。國王奏を聞きて急に龍座を下り、身を躬めて上殿へ迎ふるに、三個の道士、國王を見ても敢て禮を行はず、甚だ慢れり。國王道士に對して曰く、國師朕が未だ請じ奉らざるに來給ひしは何事の有りや。虎力大仙が曰く、一大事の候へば告げ奉らん爲來れり、夫は先さし置き、那階前に立ちし四個の和尚は那里より來り候者ぞ。國王が曰く、是唐土大唐の差、西天に往きて經を取りきたらんとて、此に到り關文を換へん事を願ふなり。道士大いに笑つて曰く、我他が事を奏せんとて來れるに、不圖他們此に在るこそ幸なれ。國王驚いて曰く、他が徒何に因て尊顔を冒し罪を得たるや。道士が曰く、陛下は未だ知り給ふまじ、他昨日きたつて城外に於て兩個の徒弟を打ち殺し、五百個の囚僧を走らせ、剩へ三清觀に忍び入りて三聖の像を毀

壞し、御賜の供物を偷み喫ふ、我等は只天尊の天降り給へると心得、金丹聖水を求めて陛下に奉らんと思ひ候に、那斷器の中へ小便を遺れて我等を嘲弄し候、陛下宜しく是等の罪を糺し給へ。國王聞きて大いに怒り、武士に命じて四衆を誅せんとす。行者叫んで曰く、陛下且く逆鱗を息めて貧僧が啓奏るを聞き給へ、昨日我等他が兩個の徒弟を打ち殺せし覺なし、亦囚僧を放せし事は猶々知り候はず、其上三清觀とやらんへ忍び込み、供物を偷み尿を垂れしなんど、誠に見證なき无實といふべし、我們は東土の產にて、初めて此國にきたり未だ街道だも志らず、況や其三清觀に於ておや、陛下是等を以てもよく察し給へ。國王是を聞きて更に決斷定まらざる處に、又黄門官來つて奏すらく、許多の鄕老きたりて轉奏を願ひ候と啓す。國王聞きて即時に命じ宣れて其奏問をとふ。衆民頭を叩いて曰く、一春雨不降、夏にいたりて乾荒甚しく候間、願はくは國師を請じ奉り雨を祈りて、普く下民の塗炭を濟ひ給へ。國王奏を聞きて三藏們に向ひ、朕道士を敬ひ僧を滅す事は、當年乾荒の時僧に命じて雨を要めしむるに、更に一點の雨をも降し得ず、然るに天幸に國師を降して雨を祈るに、忽ち其驗を現し民の塗炭を援く、爾今遠く來つて我が國師の飯を冒す、即時に誅戮すべけれども姑く其罪を恕さん、汝よく國師と行力を競べ、雨を要めんや麼

や、もし雨を祈り得るならば其罪を饒し、關文を換へて西天に赴かしめん、はたまた雨を得る事能はずば汝を典刑せん。行者答へて曰く、是何より易き事なり、早く國師と勝劣をくらべしめ給へ。國王其時衆官に命じ壇場を打掃させ、親は五鳳樓に登つて是を觀看す。斯くて虎力大仙まづ上壇へ昇らんとするを行者引住めて曰く、先生今日雨を祈る、望むらくは明白に績を得せよ、方知雨下らば是卿が功績なり。虎力嘲笑うて曰く、われ壇上に一度喊ばゝ風起り、二聲喊ばゝ雲起り、三聲に雷なり、四聲に大雨降り、五聲にして雨晴れん事何の疑ひかあらん。行者笑つて曰く、妙々、呵果てたり、早々請了々々。虎力其時拽開に歩みて壇に上りければ、衆々息を詰めて是を見る。虎力は壇上に立定ちて、小道士に符を捧げさせて周に立たせ、躬一口の寶劍を執り呪語を念へ、一道の符をやきて一聲令牌すれば、忽ち半空のうち悠々と風色翻りきたる。行者是を見て、一根の毫を拔きて變じて我が假身としつ唐僧の傍に立たせ、本身は走つて空中に至り、高く司風々々と呼ぶ。風婆々慌てゝ布袋の口を捻住め、巽二郎は口繩をとゞめて行者が前にきたり禮をなす。行者が曰く、我唐僧を保護して西天にいたり經をとらんとす、然るに今計らず妖道と勝を賭にして雨を祈る、汝怎麼ぞ老孫を助けずして却て妖道を助くるや、汝今風

を把收めず些の風兒にてもさゝば、我鐵棒をとつて汝を二十棒打たん。司風大いに恐れ、我敢て風を吹かせ候はじといひて走り去る。道士は斯くとも知らず、又令牌を取り符を燒きて撲と下に一打てば、推雲童子忽然として雲を佈き、作霧郎君霧を起し來る。行者急に喝び止め前のごとく分付けゝれば、推雲童子雲を收めさる。道士は既に二度まで手をとりて大いに焦燥ち、髮を散し呪を念じて符を燒き、また令牌を一下すれば、只看鄧天君、雷公、雲母を領いて當空に到る。行者又喝び止めて前のごとく令し、扨問うて曰く、那道士そも何の法をなしてか天君かく肯するや。鄧天君答へて曰く、那道士五雷法をならひ得て、符を燒き玉帝を驚かす、因て我們旨を奉り雷電を助け雨を下さんとし候。行者が曰く、既に如此くならば、且く住りて老孫が行ふ事を伺ひ待てよ。鄧君唯々として雷電を鳴閃かさず。茲に於て道士は案に相違し愈加着忙し、また符を燒き呪を念へて令牌を打ち下すに、半空の中四海の龍王ひとしく來り集りけるが、行者を見て急に上禮を施す。行者また前のごとく說き了りて雨を止め、扨いひけるは、那妖道が四聲の令牌已に畢る、是より老孫が輪到なり、衆列俱に我を助けよ、我棒を上げて爲號する時一指に風至り、二指に雲を佈き、三指に雷電を發し、四指に雨を下し、五指に天晴れ日出づべし、

若是に違ふ者は我が鐵棒を喫はすべしと分付けゝれば、衆神命を領して去る。行者今は心易しと雲頭より下りて輦を把つて上身に收め、高く叫んで曰く、先生々々、四聲の令牌ともに已に呼び終ると雖も、更に風雲雷雨なきは何事ぞと嘲笑ふ。虎力大いに面目を失ひ、すご〳〵と壇を下り、五鳳樓に進み昇る。國王問うて曰く、國師已に令牌四聲に及びてなほ風雨なきは何故ぞ。道士が曰く、今日は龍神他行して家に在宿さず、故に雨降り候はず。行者階下に在りて是を聞き、大いに叫んで曰く、陛下、道士が妄言に迷はされ給ふな、諸神みな在宿すといへども、只是國師の法術靈ならざるに因て雨風降らず、貧僧が師父一度祈らば、風雲雷雨須臾に到り候べし。國王が曰く、如此くならば早く壇に上り祈つて雨を降せ、我玆に在りて親しく看ん。三藏、行者が袖をひかへ耳語きけるは、我敢て雨を祈るの法を知らず、汝みだりにいふ事勿れ。行者が曰く、心を勞し給ふまじ、只管經を念み給へ、我宜しく手段ありと。玆に於て三藏壇に上り經を念ず。行者、師父が經を念み盡るを聞きて一棍を上げ、空を臨んで一指を揮れば、俄然として風吹きいだし、砂を飛ばし石を走らす。行者また棍をとつて一指すれば、只看昏霧朦朧として濃雲たなびき起る。又一指すれば、雷响り電閃き大地も裂け山岳も崩るゝが如し。又一指すれば、忽ち大雨盆を傾す。

がごとく、辰の刻より降りいだして午の刻に至る。國王旨を傳へて雨を敷了めよと有りければ、行者就ち棍を把つて空に向ひ一指すれば、霎時の間に雷止み風息み雲散じ雨收りて依舊く日輪果々として曦き出でたり。國王大いに其道德を感じ、駕を促して宮中に回り、已に闕文を換へて唐僧を放し去らしめんとするに、那三個の道士國王を制し、陛下且く闕文を換へ給ふ事なかれ、一言申す事有りとぞ妨へける。

四六　外道弄強欺正法　心猿顯聖滅諸邪

此時國王、道士に向ひ其故を問ふに、道士が曰く、陛下よくおもひ給へ、我們這國にきたりて政を保くる事二十餘年なり、然るに今這和尚法力を弄ひて我們が聲名を敗る、陛下只一場の雨をもつて死刑を恕し給はん事いと輕忽のはからひなり、我が望むらくは再び賭をなして勝劣を試みん事を欲す、願はくは他にも命じ給へ。國王また那に迷はされて闕文を收めて曰く、國師の望何事か協へざらん、されば此度は何を賭にせんとするや。虎力大仙が曰く、我他と坐禪を賭にせん。國王が曰く、國師の見大に差へり、那和尚は元來禪敎の出身なり、汝怎麼として他に勝つ事

が得ん。虎力が曰く、我がいふ坐禪は是別趣なり、異名を呼んで雲梯顯聖と做す、百張の卓子を要めて五十張を一禪臺となし、一張々々たゝみ重れ、一朶の雲頭に駕し、臺上に上り坐して約をさだめ、幾干時動かず坐禪する事に候。國王よろこび、三藏に向ひ問うて曰く、我が國師汝と雲梯顯聖の坐禪を賭にせんとす、汝において奈何。三藏行者に耳語いて曰く、我坐禪は會ふべけれども雲頭に駕ること能はず、是をいかゞせん。行者が曰く、師父たゞ命に應じ給へ、老孫、師父を送りて雲上に駕らんこと何の難き事あらん。三藏是に依て對へて曰く、貧道、雲梯顯聖の坐禪をなし候はん。國王聞きて、官人に命じて、殿前の左右に兩坐の禪臺を高く設けしむ。虎力大仙其時殿を下り、身を一度縱して一朶の祥雲を踏んで、徑に西邊の臺に上りて坐す。行者是を見て一根の毫を拔きて變じて我が假像となし、八戒、沙僧、二個を五色の祥雲に化作りて三藏を駕せて空中へ引上げ徑に東邊の臺上に至り坐せしむ。斯くて兩個坐する事多時くして勝負を分たず。此時行者心中に一個の計を生じ、身を變じて蟭蟟蟲となり、飛んで西邊の禪臺にいたり、また變じて一條七寸許の蜈蚣となり、徑に道士の鼻へ入りければ、虎力大いに驚き、忽ち法力を失ひ、臺上より眞逆に落ちて幾乎絶死したり。小道士們慌て騷ぎ、救け起して藥湯を服さしめ

て介抱す。國王も大いに驚き、文華殿へ扶け入れしめ、醫官に命じて保養せしめらる。行者は祥雲に駕りて師父を眺ひ下し、階前に至つて曰く、我が長老已に勝を得たり、快く關文を換へて出し給へと叫ぶ。鹿力大仙又奏して曰く、陛下先他に關文を與へ給ふな、我が師兄頃日風疾いたり、是に依て高き所に到る時は天風に冒されて、おもはず唐僧に負けたり、我また唐僧と一個の賭をなさん。國王悅び、其賭の趣意を問ふ。鹿力が曰く、我が賭を號けて隔板猜牧と云ふ、是別事ならず、筐の裡に物を入れ、猜し當つる事なり、唐僧よく猜し得ば罪を免して關文を與へ給へ、もし猜し得ずんば斷罪して我が師兄の恨を雪がん。國王聞き得て、旨を傳へて一個の硃紅漆の櫃を取よせ、內官に命じて後宮へ入れ、娘々をして寶貝を放下めて殿前へ擡き出させ、唐僧、道士に令を下し、櫃の裡なるは何物なるや、猜し中てよと命ず。行者は變じて蟭蟟蟲となり、唐僧の頭上にとまり暗に曰く、師父心易くおもひ給へ、我飛び去つて見きたらんと。遂に飛んで櫃の脚の下に到り、一條の縫兒より潛り入つて是を見るに、山河社稷神、乾坤地理の裙なり。行者散々に抖亂り、指を咬んで一口の血を噴きかけ、變じて破爛流丟と一口の鍾となし、又縫裡より潛り出で、飛びきたつて三藏の耳朶の上にとまりて曰く、櫃の裡なるは破爛流丟と鍾なりと敎ふ。三藏聞

きて前に進み出で、貧僧よく猜し候はんといふ。鹿力喝つて曰く、我猜し中てん、那の櫃の裡なるは山河社稷の襖、乾坤地理の裙なり。三藏が曰く、我が見は是と大に違へり、只破爛流丟と一口の鍾を入れられたり。國王大いに腹を立て、這野僧朕を悔りて寶なしとするや、甚麼ぞ流丟、鍾の如きものを入れんや。三藏が曰く、陛下まづ櫃を開き見給へ、若是寶貝ならば貧道罪に伏せん。國王此上はとて櫃を開かしむるに、果然唐僧の猜せし如くなれば、國王大いに怒り、誰かかる物を入れおきて朕を辱しむるや、待て〳〵、我自ら一個の寶を入れて猜させんと、又櫃を後宮へ擡入れさせ、國王御花園に下りて一個の桃を摘つて櫃の内に藏し、官人に命じて殿前へ擡き出し來らしむ。行者また飛び去つて縫兒より潛り入りて見るに、大なる桃子なりしかば、即ち原身を現して櫃の内に坐して桃を喫了ひ、核ばかりを遺しおき、又蟭蟟虫となり飛び出でゝ三藏が耳朶の上にとまり、櫃の裡なるは桃の核なる事を告げゝるにより、三藏また猜せん事をもとむ。羊力が曰く、我先猜せん、櫃の内なるは一つの仙桃なり。三藏が曰く、是は桃にあらず、桃の核を入れられたり。國王心中に唐僧が猜し不得を悅び、官人に命じて櫃を開かしむるに、果然桃の核なれば大いに驚き、我親ら桃を藏し入れ置きしに、何故核ばかりに成りしにやと更に不可解、惘然

いふ處を忘らず。此時虎力大仙保養を加へ衣服を改めて出で來り、殿に昇つて曰く、這唐僧搬運抵物の術ありとおぼえ候、我其術を破り候はんと、乞ひて櫃を後殿に擡入れさせ、心中におもひけるは、他よく物を抵得術有れど人身を抵得る事は能はじと思惟し、一個の小道童を櫃の内へ入れて擡き出させ、三藏を呼んで猜させんとす。行者又例のごとく飛び去り潛り入つて見るに、一個の小道童なりしかば、身を搖して一變して虎力仙となり、櫃の内に進んで曰く、我這法を以て茲に來る事別事ならず、おもふに那唐僧必ず是小童なりと猜し當てん、よつて儞が頭を剃りて和尚となし、我和尚なりと云ひ猜て他に勝たん。童子が曰く、只師父の意に憑さん、兎も角もして他唐僧に勝ち給へと承引くにぞ、行者悅び、鐵棒を變じて剃刀となし、童子の頭を剃り落して曰く、頭は已に和尚となれども、未だ衣裳は道服なり、快く脫ぎて出せ、我是を變ぜん。那童子唯々として穿る處の葱白色の鵝氅を脫ぎて出しければ、行者一口の仙氣を吹きかけ、變じて黃色の直裰となして他に穿せ、又一棍の毛を拔きて變じて木魚となし、他に授けて曰く、儞此櫃の内に居て、もし道童と呼ぶ時は千言するとも出る事勿れ、若一こゑ和尚と呼ばゝ、自ら蓋を開いて木魚をたゝき口の裡に阿彌陀佛と念じて出できたれと命じ、又蟭蟟虫と變じて潛り出で、去つて三藏

の耳朶にとまり、櫃の内なるは和尚なりと教ふ。時に虎力、三藏に向ひ、汝櫃の中なる物を猶てよといふ。三藏が曰く、是何より易し、櫃の内なるは一個の和尚なりと只一聲呼ぶところに、那童兒頂をもつて櫃の蓋を開き、魚鼓を敲き、佛名を念へて出できたる。三人の道士案に相違し、惘れ惑ひ口を禁んでいふ處を知らず。國王が曰く、這和尚の法力神鬼の輔有るに似たり、今は他に關文を換へ與へん。虎力大仙また奏すらく、陛下まづ其ことを待ち給へ、我們別に一奇藝あり、他と再び此賭をなさん。國王の曰く、甚麽の奇藝なるや。虎力が曰く、我們兄弟三人ともに一術あり、頭を砍つて再舊のごとく還接け、腹を割き心を剜ちて再び疵全く癒え、油を鍋に滾してよく洗澡す。國王大いに驚き、此事總て死を尋むるの路なり、恐らくは危からずやと難ず。虎力がいふ、我等法力有りて些も身を過つ事なし、陛下心を易んじて快く用意をなし給へと申しければ、國王是非なく三藏們を呼んで曰く、國師、汝徒を放す事を肯はず、今一度賭をせん事を望む、則ち砍頭り剖腹下き滾油洗澡するを賭にせんとす、爾よくせんや否や。行者本相を現して曰く、貧道此三事を恐れず、望に任せて賭をなさんと應ず。是によりて國王旨を傳へ、行者を捉へて殺場に到つて頭を砍らしむ。劊子手命を得て行者を綑り、劍を拔き聲をかけて丁と首を斬りおとし、三四十

歩も踢け去るところに、行者が頭の腔子中より更に血出でず。只きく肚の裡に叫ぶ聲あり。須臾して頭おのれと回りて腔子中に接ぎ合ひ、些の痕をも殘さず舊のごとし。監斬大いにおどろき、急ぎ朝に入つて斯くと奏聞す。行者は拳を捻つて綑繩を撑れ斷り、走つて殿前に至り、我が首すでに砍つて又接ぐ事を得、早く國師の頭をも砍りて試みよと叫ぶ。虎力心得たりとて場所に至れば、劊手また虎力が首を砍り落すに、是も腔子裡より血出でず。あはや頭還りきたらんとす。行者早く身を變じて一羽の大鳥となり、虎力が頭を啣んで御水河の深淵に落し沈む。虎力が骸胸の裡より三聲連けて叫べども頭かへり來らず、遂に腔子中より鮮血ながれ出で身體倒れ死す。衆人驚いて是を見れば、一隻の黃毛の虎なり。監斬走りて朝に入り斯くと奏しければ、國王色を失ひ驚き駭ぐ事大かたならず。鹿力が曰く、師兄死せりといへども黃虎となるべきやうなし、是必ず那和尚掩樣法をつかうて斯のごとく見するならん、我他と破腹の賭をなさん。國王聞きて劊子を呼び、行者を拿へ去らしむ。行者が曰く、拿ふる事勿れ、我自ら往き自ら腹を裂きて臟腑を洗刷せんと、搖搖擺擺歩みて徑に殺場に至り、身を大椿の樹に靠り、衣帶を解き開き肚腹を露出す。那劊子短刀を把つて行者が心下に突立て臍の下まで斷ぎけば、行者双手を以て肚を爬みひらき、腸臟を拿

り出し一條々々理勾事多時して、又依舊く腹に收め、一口の仙氣を吹けば、依然として一點の痕をとゞめず。監斬駭き惘れて此よしを回り奏す。國王益々おどろき騷ぐ所へ行者走り來り、鹿力大仙肚を割いて見せよと請ふ。鹿力が曰く、我又汝に不輸と、搖々擺々と、歩みて殺場に至り、創子に命じ腹を割き開かせ腸を把り出す。行者早く變じて一羽の鐵鷹となり、翼を翅きて飛び來り、鹿力が五臟をことゞく抓んで其所ともさらず捨て置きけり。是に依て、鹿力大仙腹破れ屍倒れて死するを見れば是一頭の白鹿なり。監斬諕得て又斯くと報ず。國王大いに怕れ恠みて心決せず。羊力大仙奏して曰く、師兄二個とも死して獸の形を露出す、是皆那和尚法術を弄うて人目を惑はすと覺えたり、我沸油の賭をなして師兄の仇を報ぜんと望みければ、國王又令を下し、一個の大鍋に滿々と香油を貯へ、烈火を燃して油を滾燒らし、行者を呼んで、汝快く鍋の中に入りて洗澡せよと望む。行者一議にも及ばず、布の直裰を脱ぎ、虎の皮の裙を解き、跳つて鍋の丙に入り、翻波鬪流する事さながら亦を沐みるがごとし。八戒見て沙僧が袖を引き、這老猴這般の奇技あらんとは思はざりきと喞々き、兩個只管に誇奬す。行者是を見て心疑ひ、那獸子我を嘲り笑ふかと心得、一驚を喫はせ戯亂へさせんと巧み、遂に油鍋の底に沈み、變じて棗の核となり、再度浮み出です。監斬官是を見て大いに悅び、那和尚滾油の中に烹死し候と奏す。國王も大いに悅び、急ぎ骸骨を撈し上げて取りきたれと令しければ、心得候とて、一把の鐵笊籬をもつて油鍋の裡を撈すといへども、荒籬の目荒ければ行者孔より漏れ落ちてすくひ得ず。依て又奏して曰く、那和尚骨まで幼嫩溶化了と申す。國王曰く、然らば再び一個の和尚を烹殺せよと命ず。兩邊の官人、八戒が面の兇なるを見て、先八戒を揪へて綑らんとしければ、八戒大いに慌てゝ匐つて曰く、此弼馬溫の濮猴、よしなき賭をなして油鍋の焦となり、尙我をも殺さんとするは何事ぞと、亂跳んで悲み啼く。行者鍋の底にて聞き、獸子よ、亂罵くなと呼はり、本相を現して跳り出づ。諸人大いに驚き急に朝に入り、和尚猶死せず、油鍋より跳り出で候と奏する間もなく行者衣服を穿て走り來り、羊力に向ひ、汝も油鍋に入つて洗浴せよと望みければ、羊力殿を下り衣服を脱いで油鍋の丙へ跳り入り洗澡する事行者に劣らず。行者油鍋の邊に行き手を伸べてさぐり見るに、那滾油總て氷冷となれり。心中におもふやう、是必ず冷龍此に在つて護持するならんと。急に毫毛を拔いて假身となし、本身は空中に跳り上り、咒語を念じて北海の龍王を喚び寄せ問うて曰く、怎麼ぞ妖道を助けて鍋の底に冷龍を住めて滾油を冷油となすや。龍王が曰く、小龍敢て他を助け

す、大聖知り給はずや、這擊吝苦心修行して、那冷龍を自ら煉的作り此技をなす處なり、小龍今他が冷龍を把つて收め去らん、然らば他が術盡きて骨碎け皮焦げん。行者が曰く、趂早收了めよ。龍王諾して一陣の狂風と化し、油鍋のほとりに到り、冷龍を捉つて北海に回りければ、羊力滾油の内に有りて爬ひ出る事能はず、七顚八倒して須臾の間に骨脫け肉爛れて死しけるにぞ、臨斬官急ぎ朝に走り行きて、羊力國師油鍋の内にて死し給へりと奏しければ、國王聞いて聲を放つて大いに哭く不知其後の事跡は下回を見て分解すべし。

四七　聖僧夜阻通天水　金木垂慈救小童

話說那國王は、三國師の死亡せしを傷み歎きて泪止らず。行者、殿前に進み高く呼んで曰く、陛下怎麼かくまで妖魔に昏亂されて深く哭き給ふや、見放著、三道師の屍、一個は虎、一個は鹿、一個は羚羊なり、是原來成精たる山獸にて、假に道士と粧け此にきたりて陛下を害せんと謀れども、いまだ氣數盡きざるが故に敢て手を下し得ず、僧道を破滅し佛法を亡す事、是其顯證なり、もし今二年の月日を送らば、陛下の氣數衰へ、他們が爲に生命を害せられ、江山ごと

ごとく妖魔に落はれ給はん、幸に我們此國にきたりて、妖邪を除き國害を救ふは大なる幸福ならずや、快く迷の朦霧をはらひ、僧を招回し政を正して萬民を按撫し給へと、理を盡して諫めければ、國王初めて悟り、深く感謝して曰く、朕不明にして妖邪の爲に惑溺せられ、殆ど國を失はんとせしに、天、聖僧を來して國害を除かしめ給ふ、敢て謝するに所なしとて、急に大師に命じて唐僧徒弟を智淵寺に送りて種々に酬謝し、其夜は寺に安歇せ、次の日五更に國王朝に出で、官人に旨を傳へて快く僧を招回す榜文を四門の各路に張り掛け、殿上に筵宴を設け駕を擺して智淵寺にいたり、三藏師徒を請了て殿中に回り、歡喜の興宴をなし、闕文を換へ授與しければ、三藏大いに悅び、別を告げて立出づるにぞ、國王、皇后、嬪妃をはじめ兩班の文武是を送りて朝門を出づ。是より前、那行者がために脫命れたる五百們の和尙等、僧を饒し給ふとの榜文を掛けられしと聞き、個々勇み悅び連々城に回りきたり、路上に跪き三拜して、齊天大聖爺々と稱へ、我等は是沙灘の上にて脫命の恩を蒙りし僧人なり、聞知るに大聖妖孽を掃除ひ、我等を救ひ給ふ難有さよ、願はくば毫毛を納め給へと叩頭いで申しければ、行者わらうて一々毫毛を納め、君臣に對して曰く、這和尙們妖魔に役せられて已に死に向たりしを、老孫前に救ひ走らしめ、

兩個の妖道を打ち死したり、向後再び胡爲なる事に惑はず、信を守り三道を把つて一致に歸し、僧を敬ひ萬民を育て國の長久を謀り給へと誡めしかば、國王感謝に不盡、終に別れて城を送り出しけり。斯くて三藏等は只管路を急ぎ、曉に行き夜に住り、渴しては飲み飢ゑては食し行く程に、春盡き夏殘けてまた秋光の天に至る。然るに一日天色已に晩れければ唐僧馬を勒へて曰く、徒弟等天已に晩れたり、一宿を乞ふべき人家はあらざるか。行者聲に應じて曰く、此邊すべて嶮峻にして更に一軒の人家もあらず、月光に乘じて今一程走りて、人家ある所に至りて宿を要め候はんと。師徒是によりて沒奈何また行者に隨ひて行くこと幾千もあらざるに、只聞く滔々浪々と響く聲あり。八戒が曰く、罷了々々、路是にいたりて窮きたり、是一般の水攔なり。唐僧聞いて怎生か此川を渡るべき。八戒が曰く、我先此川の淺深を試し見ん。三藏が曰く、汝獸子亂談を休めよ、這川の淺深如何して知る事を得ん。八戒が曰く、我一個の石頭を拾ひ來り、是を河の當中へ拋り、もし水の泡起つときは是淺し、もし骨都々々と沈む聲ある時は深し。行者打わらひ、汝早く試みよ。八戒路旁の石頭を拾ひとり、水中を望んで拋げ込みけるに、只聞く、骨都として沈みぬ。八戒是を聞いて深し〳〵というて惘然たり。三藏が曰く、汝川の淺深は試みたれども、未だ多少

寬濶を不知、是をも試みよ。八戒が曰く、其事は敢て知りがたし。行者大いにわらひ、然らば何の益かあらん、いで老孫見きたらんと觔斗雲に跳駕り、空中に上りて定睛と觀るに、洋々として月の光を浸し、浩々として影天に浮ぶ。靈波は花岳を呑み長流百川を貫き、千層の河涙は瀉き上りて萬疊となり、岸口には漁火もなく、砂頭には只鷺のみ眠り居て、四方渺茫として海のごとく、一望さらに邊際なし。行者歎息して、雲を收め川邊に下りて曰く、扨も寬哩々々、我が火眼金睛、日の裡は千里の內外を見、夜と雖も五百里の間を見る事を得、然るに今通看所更に邊岸なく、寬濶の程を知る能はず。三藏聽いて大いに驚き泪に咽嚥で曰く、徒弟等是は何とせんと。沙僧諫めて曰く、師父哭き給ふ事なかれ、我那里を見るに水邊に立つ者あり、是大かた人ならん。行者が曰く、おもふに是漁人ならん、我往きて他に問ひきたらんと、鐵棍を把つて跑け到り見るに、是人にはあらずして一面の石碑なり。碑上に三個の篆書の大字あり。下に兩行の十字の小字あり。三個の大字は通天河とあり。小字は徑過八百里亘古少行人とあり。行者、三藏を呼んで是を見するに、三藏一目見て涙をながし、當年長安を出でしより、只西天に行きて經を取らんとのみおもひて、或は妖冤に阻てられ、或は山水の遙なるに隔てられ百辛千苦

せしに、今また此所に到りて渡るべき手段に盡きぬ、是は何とせんと憂ひ悶ゆるをりしも、幽に皷鈸の音聞えたり。八戒が曰く、おもふに是人家ありて齋を做すと覺えたり、いざや俱に歩みて些の齋飯を請ひ、宿をも借らんと勸むれば、師徒是に同じて再び進み行くに、一つの正路あり。四衆大いに力を得、漫々たる沙灘をすぎてのぞみ見れば、果然一簇の人家四五百軒許あり。三藏馬を下りて路の頭の家を見るに、門外に一首の幢幡を建て、燈を煌し香を馥せたり。三藏、悟空を顧みて曰く、此所、山凹河邊に比ぶれば、暫へ簷下に寢るとも冷露を遮り放心穩く眠るべし、汝等は是に待て、我先いたりて宿を求めきたらん、もし肯ひて我を住めば汝等を呼ばん、假若不留とも汝們撒潑る事なかれ、汝等が臉嘴醜露にて、恐らくは人を讒了てさせて禍を引き出し、住する所なからん。行者領掌し、師父先行き給へ、我們這所にて待ち候べし。三藏遂に笠を持ち錫杖を拖つて、徑に人家の門外に到りけるに、門半開け半は掩りたり。三藏敢て擅に入らず、聊站むところに、裡より一個の老者走り出づる。其躰項下に珠數をかけ口に阿彌陀佛を念へ、自ら門の戸を關めんとす。三藏急に合掌し、高く呼んで曰く、老施主暫し待ち給へ、貧僧問訊あり。老者が曰く、汝きたる事今些し遲しと。三藏其理を知らず、怎麼說

に候やと問ふ。老者が曰く、來る事遲きゆゑに物なし、若早くきたらば我が舍に齋ありて、衆僧ことごとく飽くまで飯を喫し、其上に熟米三升、白布一端、銅錢十孔づゝを施せり。三藏躬身めて曰く、貧僧は是齋に逢はんとて來りたるにあらず、是は東土大唐の欽差にて、西天に至りて經をとる僧なるが、今這里にきたり天色已に晚れたり、然るに宿るべき家もあらず、幸に皷鈸の聲を聞きて、特來つて一宿を請はん爲なり。老者手を搖つて曰く、和尚は出家人に似げなく誑話をいふ人かな、東土大唐より我が此里にいたるには五萬四千里の路あり、然るに單身にて奈何ぞ來る事を得ん。三藏が曰く、老施主の言理あり、但し貧道單身ならず、三個の小徒あり、山に逢うては路を開き、水に遇うては橋をわたし、貧僧を保けて方に此所に來れり。老者が曰く、已に徒弟あらば何ぞ同じく來り給はざる、我が舍に安歇申す所あり。三藏悅び、頭を回して、徒弟此處へ來れと呼ぶにぞ、行者は原來性急なり、八戒は粗魯しく、沙僧は生得弉弉なれば、三個師の聲を聞くとひとしく、馬を牽き擔を排著き、一陣の風の閃くがごとく走り來る。老者此徒を見て諕得て跌け倒れ、妖怪來れり命を救へと呼はりければ、三藏是を挽け起して曰く、施主怕れ給ふまじ、是妖怪にあらず、我が徒弟なり。老者が曰く、這般の好師父に怎麼ま

た此やうに醜き徒弟を將れ給へると戰々兢々問ひければ、三藏答へて曰く、人は相貌によらず、這三人の徒弟皆神通有りて、龍を降し虎を伏し妖魔を捉ふる事、袋の物を探るがごとし、是に因て貧僧遠く此里まで來る事を得たり。老者未だ半疑半信ながら、先唐僧師徒を裡に入る。行者、八戒は馬を拴ぎ行李を丟下して廳に至り見るに、幾個の僧、經を念み居たりけるが、行者、八戒、沙僧が進みきたるを見て衆人恐れ悚き逃跑り、花燈を踏み倒し經机を蹴散して、儞頭撞我頭ちあふさま葫蘆架に風の吹るゝに異ならず。三人は是を見て思はず嘻々哈々と笑ふ。三藏喝つて曰く、這兒頑、先には老施主を駭し、今又多くの和尙を謊倒てさせ、却つて我に罪を與ふるやと言ひこらしければ、行者、理に伏し主翁に向ひ禮をなし、老爺、我們が無禮を纔關了、早く花燈を了花て佛事を將り收め給へ。老者此言に心を安んじ、童僕を呼びて火を點さするに、皆行者、八戒を見て、妖怪來れりとて逃げ入りけるにより、行者自ら燈燭を點ず。此時また一個の道士出できたり、是はそも何の妖精なるやと問ふ。先の老者が曰く、那和尙等は妖怪ならず、大唐より西天に到り經をとる羅漢の徒弟にて、相貌兒なれども皆是善人なり。那道士是を聞きて四衆に禮をなし、一齊に坐しければ、童僕等も方寸に怕をとゞめ、茶を献じ齋を擺いて欵待しけり。四個齋

を罷ひて後、三藏、老者に問ふらく、老施主の高姓は何と稱び候や。老者が曰く、姓は陳氏にて候。三藏が曰く、貧僧も姓は陳氏なり、扨今は何の齋をかなし給ふ。老者が曰く、是は豫め亡齋を修し候なり。三藏が曰く、是何の亡齋ぞや。二個の老道士一齊に淚を流して曰く、長老聞き給へ、我が這里に一座の靈感大王の廟あり、那大王年々甘雨を施し慶雲を降し、五穀の豐饒を扶く、されども是正神にあらず、一年一次の祭賽に童男童女を牲醴に供へしめて喫ふ事を好む、是を供ふれば我們を保けて雨を調へ風を順にし、若供へざれば鬼を降し害を生ず、今年我が舍輪到にて、悲しきかな老拙は陳澄とて今六十三、舍弟は陳清とて五十八歲、我が止生の一女纔に八歲、名を一秤金と申す、舍弟の止生の一男纔に七歲、名を陳關保と呼び候、二人ともに今夜大王の廟へ牲醴に出し候、流石恩愛の情捨てがたく、孩兒等と與に個の超生道場をなし、豫め亡齋を修し候なりと、語る裡より淚雨のごとく、聲を呑んで哭き伏しけり。三藏も此言を聞きて淚を不住、衣の袖を濕ぼりぬ。行者が曰く、老公、汝が府上に多くの家財あらん。老者答へて曰く、些の家資あり、水田旱田一二百頃、草塲九十處、舍下に不喫の糧、若干の衣服銅錢あり。行者が曰く、已に斯のごとく富豪ならば、何ぞ兩個の童男女を買ひて祭に賽

べざる。二老とも哭いて曰く、和尚は仔細を知り給はず、那大王甚だ靈異にして、平素我們が家に來通ひて我們が孩兒を見たれり。行者が曰く、他來通ふに甚麽の摹樣なるや。老者が曰く、未だ其形を見ず、只一陣の香風を聞く時は是大王の來れるなり、依て忙しく香を焚きて禮拜す、他我等が一家の人等を個々に認得れり、殊に親生の兒女を要めて喫はん事を望む、假令買ひ要むるとも一般の貌の者を得る事難し。行者が曰く、我おもふ旨あり、汝が童女を抱き來つて我に看すべし、自ら手段あらん。陳清、何事かは知らざれど、房內に入りて陳關保を抱きて廳上へ出で來る。小兒なれば今死する身とも志らず、菓子を拿り花を弄して餘念なし。行者定と見て身を搖すよと見えけるが、忽ち變じて關保が摹樣となり、兩個燈の前に在りて遊び戲るゝさま、只是二根の牡丹の咲き出でしに異ならず。陳清大いにおどろき、和尚何ゆゑ我が孩兒と一般姿とはなりたまふ、願はくは本相を現し給べといふ。行者聲に應じて本相を現し、問うて曰く、今の像汝が愛息と違へりや否や。陳清が曰く、更に分毫も違ふ所なし。行者が曰く、然らば我汝が孩兒に替りて牲醴とならんは如何に。陳清大いに悅び、跪下き頭を叩いて曰く、和尚慈を垂れて我が孩兒を救ひ給へ、香烟後代には白銀一千兩を唐僧に献り、盤纏となして西天に往き給ふ便と

せんと、說ひ罷んで叉磕頭して只管に歎き憑む。陳澄は只默然として柱に倚りかゝり、愁然として泪を流し居たり。行者進み問ふやう、老爺汝も女兒を痛み哭くか。陳澄急に跪下いて曰く、萬望我が女兒をも救ひ給へ。行者が曰く、汝憂ふる事勿れ、那嘴の長き和尚を變じて汝が女兒となし、兩個の命を救ひ得させん。八戒是を聞き大いに驚きて曰く、哥々汝左も右もせよ、我は代身となりて喫はれん事を要めず、我決して不肯。行者が曰く、汝原來三十六般の變化あり、怎麽ぞ不會ろや。三藏聞きて八戒に向ひ、行者が云ふごとく、人の性命を救ふは七級の浮屠を造るに勝れり、左も右もして女兒の命を救へと責めければ、行者、陳澄に向ひ、汝が女兒を抱き來れと分付くる。陳澄急に裡に入りて一秤金を抱き廳上に出づる。其後に就いて一家の老幼男女總て出でたり、磕頭いて禮拜す。一秤金は菓子を喫ひて餘念なし。行者、八戒に曰く、汝快く變じて此女兒の摹樣となれよ。八戒已む事を得ず、咒語を念じ頭を數度搖了し、稍多時して娘の摹樣となる。されども面目頗る胖大にして像同じからず。行者が曰く、汝今一度變じ替へよ。八戒また左右して變じ替へけれども益似つかはしからず。行者、亦變じ替へよと責むれば、八戒汗を拭ひ頭をかき、哥々只此役を饒せ、我如何に變ずれども是よりは不成と辭退す。其時行者一口の仙氣を

吹きかくれば、八戒が身、再び變じて女兒の像と一般になりたり。行者、陳氏兄弟に向ひ、汝等は童男童女を將れて隠れ居よ、さりながら今夜我們を怎麼にして那の大王に献ずるや。陳澄が曰く、兩個の紅漆の盤に二位を請うて坐せしめ、兩張の卓の上に置き、擡いて廟裡に到らん。八戒が曰く、我は是假に代身となれども喫はれん事は不肯。行者笑つて曰く、他先我を喫ふを見ば先へ逃げ回れ。八戒推返して曰く、他もし我を先に喫はんとせば又如何すべき。陳清が曰く、前年大膽の者ありて廟の後より覗き見しに、他先童男を喫ひ、後に童女を喫ふと申せり。八戒聞きて少し心を安んじ、造化々々といひて、頓て兩個の紅盤を取り出させ、二張の卓の上に直し、兩個其上に坐する折しも、忽ち聞く、外面に鑼鼓天に喧しく、燈火照耀として前門を打開き、陳清昆弟快く童男、童女を擡き出だせと口々に叫ぶ。是這里の者どもが牲醴を供せんとて來れるなり。老者兄弟は泣く〳〵二人を擡き出だしけり。

四八　魔弄寒風颯大雪　僧思拜佛履層氷

話説陳家の二老、衆人とともに童男、童女及び猪、羊の牲を擡いて鑼鼓を打鳴らし、喧々

囂々靈感王の廟の裡へ到り、先兩個の乘つたる紅盤を上首に供へ卓をならべ、敬々しく香を炷き燭を點す。行者頭を回らして看れば、廟の正面に金字に書きたる牌位あり。文字は是靈感大王之神と寫せり。時に衆人一齊に頭をもて地を磕きて曰く、大王爺々、今年今月今時の祭主陳澄、陳清等、例歲のごとく童男陳保闕、童女一秤金、其餘の供物にいたるまで、數のごとくに献上る、大王願はくは是等の牲を受用給ひ、風調ひ雨順ひ、五穀の豐登を護り給へと祝へ罷り、衆人迹をも見ずして回り去りぬ。八戒、人々の散りたるを見て行者に向ひ、衆人已に回り去れり、我們も家に回るべきか。行者が曰く、汝が家那里にあるや。八戒が曰く、陳氏が家に行きて眠らん。行者喝つて曰く、汝獸子、又亂談を吐くか、已に大王に喫はれんとて代身になりたる者の、其始終をも見ず回らば、他徒に災を降し害を貽さん、といふ言未だ終らざるに一陣の腥風吹き來る。八戒打おどろき、是必ず那大王の來るならん。行者急に制し、汝必ず言語ふことなかれ、我他と説話すべしと議する所に、忽ち廟門の外より一個の妖怪來りて廟に入り、門を鎖固め、牲の兩人に近着き問ひけるは、今年の祭主は是那の家にあたるや。行者答へて曰く、仰にや及ぶべき、陳澄、陳清が家にあたり候。那妖怪、行者が言を聞きて心中大いに疑ひ、

這孩兒甚だ大膽にて言語伶悧なり、常にきたる供養の的は、我が一聲を聞けば言なく、再び問へば魂を失ひ、已に捉り喫ふときに至りてはさながら死人の如し、怎麼ぞ今日の童よく應對へすろやと、訝り迷ひて敢て猥に拿つて不喫。再び問ひけるは、汝童男女、名を何と稱ぶや。行者が曰く、童男が名は陳保關といひ、童女は就ち一秤金と呼び候。妖精又曰く、這祭は常年の舊規にて今汝等を供献へきたるなり、されば我徑に汝們を喫ふべきなりと罵る。行者臆する色なく、我等從來其旨を知れり、大王快く喫し給ひ、雨を順にし風を調へて、五穀の能く豐饒を守り給へ。那妖精是等の應對へを聞きて、彌疑ひ、大喝して曰く、我つれには童男を先に喫へども、今年は先女兒を喫はんと號ぶを聞き、八戒大いに慌て驚きて云ふやう、大王舊例を壞りて吾を先へ喫はんとは情なし、我生稟瘦肉にて骨堅く、頗る味不好、舊によりて先童男を受用し給へといへども、妖怪耳にも不容分說、大手を披きて八戒を捉へ喫はんとす。八戒今は堪りかれ、本相を顯して紅盤を跳り下り、鈀を擊つて妖怪が脊を引掛けて倒さんとす。妖怪何ぞ驚かざるべき、手を縮めて逃げ走り、只一聲の響を殘せり。八戒ふたり顏に打わらひ、一定妖怪が甲の所を撞きたりと呼はる。行者も本相を露出し八戒を喝つて曰く、汝獸子短慮にて他を走らせ

たり、怎麼何里へ走りけんと是彼を看るに、大小の魚鱗兩個落ち散りたり。然るに妖怪の喝ぶ聲遙の空中に聞えければ、行者、八戒、續いて空中へ跳り上る。那怪兵器をも帶せず雲端に現れ、行者、八戒を見て問ひけるは、汝等は是那里の和尙にて、童男女と粧けて我を欺くや。行者大音に呼はりけるは、這濺怪未だ我們を知らずや、是は大唐の僧を保けて西天に至り經を取らん爲、今日はからずも陳氏が家に寓りて聞けば、妖邪有りて假に靈感大王と稱し、年々童男女を需めて喫ふよし、我等慈悲の心を以て假に童男女が身代となり、汝が如き濺物を捉へ禁めんとす、汝這里に住んで幾年か大王と稱し、幾千の童男女を拿り喫ひたる、一々算へたてゝ白首的せば纔に死罪を饒してくれんといふを聞きて、那妖怪また頭を回して逃げ走る。八戒早く鈀を輪して飛びかゝれば、他方に一陣の狂風と變じて、颯と通天河の裡に入り更に像を見せず。行者是を見て曰く、何とも合點ゆかず、おもふに他鱗を遺せしを以て見れば、河中に住める大魚の精にや。八戒賢げに曰く、哥々さばらく待て、明日謀を定め他を拿へ、安々と我が師父を送りて河を渉さん。行者是に隨ひ、遂に廟の裡に回り、那猪、羊を殘らず把つて陳氏が家に回りきたる。此時三藏は沙僧、陳清、陳澄等と廳上に在りて、行者、八戒が音信を待ちけるに、忽ち兩人勇み

て回るを見、三藏卽ち祭饗の事を問ふに、行者、那妖怪の事を一遍說了ば、陳濟兄弟一家の男女大いに悅び、牀舖を排き師徒を請じ、枕を高うして一齊に安寢す。却說妖怪は、水府に回り默然として憂の色面に表れ、更に不言。是に依て水府に伺候する多少の小妖ども不審り、跪きて問ひけるやう、大王例年享祭より回り給ふ時は怡悅の色あり、怎麽今年は何の煩惱しき事かある。那妖怪が曰く、常年は祭に臨んで些の餘物を持ち回りて儞們にも賞味させしが、今日は我だも曾て喫ふ事能はず、剩へ性命をも失はんとせりと語れば、小妖ども大いに驚き、怎麽としたる事に候やといふ。妖怪が曰く、是東土大唐の聖僧、徒弟とともに西天に行き、佛を拜し經を求むる者にて、那徒弟神通有りて假に陳氏が家の童男、童女となり、廟の裡に坐せしが、我が至るを見て忽ち本相を現し我を敗れり、我曾て人のいふを聞くに、那唐僧は十世修行の好人にて他が一塊の肉を得て喫ふ時は、壽を延べ生を長くすと、不期りき他が徒弟に這般神通の者あつて、我苟も他等に名を壞られたり、我豫ては唐僧を捉へ汝等と共に喫はん事を要むれども、那徒弟等師父を護る上は、怕らくは此事能ふまじ、といふ詞未だ終らざるに、一人の班衣鰕婆といふ怪一躍して列を出で、大いに笑つて妖怪に對して曰ひけるは、大王何ぞ這般弱心きことを曰ふぞ、那唐僧

を捉へんと要め給はゞ何の難き事有らん、但し我等力を寵して他を捉へ得るならば、大王如何なる恩賞を給はんや。妖怪が曰く、汝謀ありて我と力を併せ唐僧を捉へ得たらば、我が兄妹となし、汝と席を同うして重く汝を享さん。鰕婆、有がたしと拜謝し終り云ひけるは、我久しく大王の風を呼び雨を喚ぶの神通、海を攪し江を飜すの勢力あることを知る、然りと雖も、雪を降らし氷をむすぶ術に至りては可會申さんや。妖怪が曰く、兩個ながらいと易き事なり。鰕婆是を聞きて手を拍つて大に喜び、大王斯の如くの奇術あらば唐僧を捉へん事目前にあり。妖怪が曰く汝試に謀をかたれ。鰕婆が曰く、今宵三更に至らば大王趁つて快く法を行ひ、一陣の寒風を吹き起して大雪を降らし、且這渺茫たる通天河をことゞく凍になし給へ、我其中によく變化して幾個となく人形を作へ路上にさし置き、つゝみを包を背し傘を持ち車を推して氷の上を行走なせる躰をなすならば、唐僧必ず經を求むる心急にして、這躰を見て氷を踏んで渉る事必定なり、其時大王は河心に坐して他が脚踪响くを相圖に、寒氷を裂きて他等師弟を一齊に水中へ陷れたまへ、斯の如くするならば、一皷にして擒とせん事何の難き事か有らんと、手に把る如く述べければ、那妖怪聞きて滿心歡喜、此策甚だ妙なりとて、卽時に水府を出で長空を踏み、相圖のごとく寒風を起し雪

を散らし、水を結んで凍となす。此時三藏師徒四個は陳家に按宿りて有りけるが、夜の更くるに隨ひ衾寒く枕冷かに覺ゆれば、さしも嫌ぎたなき八戒目を覺して行者に向ひ曰ひけるは、哥々何とけしからず冷ゆる事ならずや。行者が曰く、汝獸子、さりとては不長俊なき事をいふ者かな、已に出家人の、何ぞ少しの冷ゆるを怕るゝや。三藏も目をさまして兩人の話を聞き、徒弟等がいふごとく扨も冷ゆる事かな、殆ど眠りがたしとて爬れ起き衣服を穿て扉を開き四方を見るに、早天曉の空となり、只看る、四方都て白雪茫々として一寸の地をも殘さず。徒弟に向ひ、汝等寒きも理なり、今是秋なるに一夜の中に大雪降りて尙霧れやらず、紛々として剪玉のごとく、偏偏として綿絮を飛ばすに似たりと、師徒多時歎嘆めて居る所に、忽ち陳澄童僕に命じて雪を拂うて路を開き湯を持ち來り、面を洗ひ給へと勸め、又少時して茶と餅とを送り爐に炭をつぎ挨拶しけるは、師徒叙坐として茶を服し給へと申す。三藏問ひけるやう、老施主、此里にては春夏秋冬の分ちなきか。陳澄わらひて申しけるは、此邊僻地にて風俗人物は上國に同じからざれど、凡一切の事に到りては天を同うし日をともにすれば、怎麼に四時の分たざるの理候べき。三藏又曰く、既に四時同くんば、何ぞ今此大雪降りて斯のごとく寒氣強きや。陳澄少時考へて曰く、時は今七月た

りと雖も昨日すでに白露の時候を交へたり、白露は則ち是八月の節なり、我が此里は毎年八月の頃に至れば霜雪の降る事あり。三藏聞きて曰く、されば我が東土にくらべては同じからず、那里には冬の節に至りて方に是あり、と話の間に平地に雪つもる事二尺に及びぬ。三藏是を見て胸を擊ち涙を流しければ、陳澄其心を忘らず、旅の愁を慰めんと、諫めて曰く、長老かならず心を苦めず、放心して逗留し給へ、我が舍下多少の糧を貯へたり、半年や一年師徒を養ひ申す共難き事候はずと申しければ、三藏泪を收めて曰く、老施主は今貧僧が苦む仔細を知り給ふまじ、我當年唐の萬歲の欽差を奉けて、西天に至り經を求めんとて長安を出づる時、國王親ら關所まで送り給はり問ひ給ひしは、汝幾時經を取りて國へ皈るべきと、貧僧かく迄に山河の險ある事を忘らず、順口に回奏しけるは、只三年の光陰を送りなば經を取りて皈りさむらはんと申し上げたるに、今已に八ヶ年に及べども未だ佛面をだに拜せず、欽差の限に違はん事の恐多さに焦慮ひするなり、今日奇緣ありて貴所に一夜の舍を得、愚弟ども昨夜の小技をもつて令息、令女を救ひたゝれば、要めて一艘の船を借り河を渡らんとおもひしに、不期も這大雪にあひ、幾時纔に功をなして故土に回る事を得んやとて、只管悲み歎くを見て、陳老さま〳〵諫め、老爺、さのみ憂ひ

給ふな、天晴れ氷化けなば家産を傾してなりとも河をわたし進らせんといひ慰むるうち、一僕午齋を進めきたる。是品物豐盛の重饗なり。師徒喫し終れば、陳老また雪洞に行きて散悶し給へとて大に筵宴を催しければ、師徒憂を拂ひ寒さを忘れ、日すでに晩景に及びけるが、三藏忽ち川面を見るに、多くの人々行走する體なれば大に訝り、陳老に問うて曰く、河水凍りて往來なき筈なるに、怎麼是何の故ぞや。陳老答へけるは、おもふに是近き河邊、みづ淺き所は堅く凍りて、氷の上を往來するにや候はんと語る處に、只聞く、那行人談話行でいひけるやう、此川廣しと雖も八百里が間悉く厚く氷りて、斯く行走するは船にて渡るよりも甚だ便利也と。三藏此事を聞きて大いに悅び、誰か行きて河の樣子を見て來らんやと要む。陳老また諫めて曰く、長老必ず忙き給ふ事勿れ、今日は早晩に及べり、明日兎も角も法給へとて其夜もまた住めけり。扨次の日曉にも及びければ、三藏起き出で、行者に命じて、汝趁馬せて氷の樣を見てきたれといふを、陳老再三諫めて曰く、先々雪融け凍解くるを待ち給へ、我們船を辨じ、安々と渡し進らせんと云へども、行者更に不肯。耳に聞くは目に見るには不如、我們師父をも誘ひ行きて共に見んとて馬を引き出しければ、陳老も諫むるに詞なく、然らば我們も共に至らんとて、小的を呼んで六匹の馬を

鞦へ、各是に跨り、打連れて河邊に行きて見るに、果然川水都て凍氷り人の行走いと多し。三藏、陳清に向ひ、這行人は那里に通ふ人にやと問ふ。陳清答へて曰く、河の那邊は西洋の外國にて、這行人は賣買を做的と覺し、我が這邊にて百錢の物は、那邊へ持ち至れば價萬錢となる、又那邊にて百錢の的を這邊に持ちわたれば、同じく百倍の利あり、利は重くして本は輕し、是那行人の死生を不顧して往來する所以なり、平日には一船に五七人も乘り、或は一艘に十餘人ものりて渡り候が、今河道氷りて詮方なき故、命を捨てゝ凍の上を步行するにや候はんと語りければ、三藏が曰く、一切世間の事只名利を重んずるなれば、他們が財利の爲に死を忘るゝも、我が勅を奉けて忠を盡すも、只是名の爲なり、他と更に差ふ所なしとて行者を呼び、汝施主の家に回り行李を收拾めてきたれ、我氷を踏んで西方に走らん。行者打笑み、然るべしとて已に去らんとするを、沙僧急に袖を扣へ、師兄少時待て、我一言いふ事有りと遮り留め、三藏に向ひて曰く、師父今既に陳氏兄弟が厚意によりて懇ふ事を得給ふ上は、氷を踏むの危きを休め、幾日の後天晴れ凍化くるを待ち、船を雇めて河をわたり給へと諫む。三藏不肯して曰ひけるは、沙僧怎麼ぞかかる愚なる事を云ふや、陽春の空ならば一日々々暖和にて凍の解くるをも待つべし、時は今八

月に向として日を追つて冷氣をまし、如何としてか氷の解くるを待つべきぞ、是を待たば空しく半載の光陰を銷すべし。八戒この論を聞きて馬より跳り下り、汝等口を開く事を休めよ、彼是と長論せんより、老猪氷の厚薄を見んと呼はり、那獣子河邊に行き、鈀を上げて力一ぱい衝き試みるに、只銅鐵の堅きが如く手响して疼みければ、大いにわらうて曰く、師父放心くおもひ給へ、錮住々々。三藏十分歡喜び相伴うて陳氏が家に回り、懇に別を告ぐ。陳清兄弟も今は止むるに詞なく、乾糧なんどを調へ、一家師徒を禮拜し畢つて、又一盤子に金銀を多く載せ、是は寸志の餞なりとて出しければ、三藏擺手搖頭分毫をも受けず。陳老種々に云ひて進めければ、行者纔に一塊を收めて二老の志を謝し、途に別れて通天河にかゝり、氷を踏んで師徒放心に進む程に、漸く晩方に及びぬれば、那乾糧をつかひ、又氷の上に輝く月星の光を力に、四を望んで歩み行くに、只聞く、忽然として水底より氷を裂く音响けば、四衆驚き慌てゝ馬より落ちたり。原來是那妖怪水底に有りて窺ひ居、馬蹄の响を聞きて神通を弄ひ一時に凍を開けるなり。行者已に氷の開くを見て半空に跳り登れば、妖怪は早く三藏が馬を把つて水中に引き入れ、三藏を捉つて、遙に水府に走回り、厲聲に呼はりけるは、如何鰻妹那里に在りや、快く唐僧を生

捕れりと勇みければ、鰻妹跳り出で、不敢々々、大王や我等が良謀を合せて爭でか逃るゝ事を得ん。妖怪喜んで曰く、誠に賢妹の良策圖に當れり、我已に唐僧を把へ得ば汝を拜して兄妹とせんと約せり、大丈夫の一言は駟馬も追ひがたしとかや、蚤く案桌ん擡りきたり刀を磨がしめよ、這和尚を蒸して心を割き皮を剝ぎて、賢妹と共に是を受用し、壽を延べ生を長うせん。鰻婆が曰く、大王少時喫ふ事を休めよ、他が徒弟等かならず尋ねきたらん、願はくは兩日を待つて他等が來らざるを見て從容と食はんと諫めければ、妖精、鰻婆が詞に隨ひ、唐僧を把へ六尺ばかりの石匣に收めて蓋をして中間にさし置きたり。却説沙僧、八戒は湧く涙に漂ひながら凍を負うて浮み出で、行者が半空の中にあるを見て問ひけるは、師父は何里に有りや。行者も更に知る事なければ、回轉して一齊に岸に上る。人ありて早く陳清、陳澄に告げゝれば、二老慌てゝ門外に接へ、三個が衣裳の濕れたるを見て云ひけるは、我等が口を苦して止め申せしは這事なり、怎や三藏長老の見え給はざるは如何と尋ねるに、三衆更に不知と答ふ。二老涙を流し聲を放つて大に悲しみ、可哀々々、船にて送り進らせんと申せしに、堅執にて從ひ給はず、事這に及べる事よと胸を打ちて歎きければ、行者慰めて曰く、二老さのみ耽憂く事勿れ、我が師父必ず死する事有るまじ、決

して那靈感王の所爲なるべければ、我等力を戮して師父を救ひ出し他を殺さん、然らば長く道里の患を除かんと語れば、二老も滿心歡喜び、急ぎ齋を調じて進めけるにぞ、三人飽くまで喫し、各兵器をとつて徑に水邊へぞ赴きける。

四九　三藏有災沈水宅　觀音救難現魚籃

却説三個は河邊に到り、行者先曰く、汝兩個商議して、誰ぞ一人水中へ下りて動止を見屆けきたれ。八戒が曰く、我等兩個行くとも好手段も出づべからず、願はくは師兄水中に下りて窺ひきたれ。行者が曰く、もし那山裡の妖怪ならば全く汝等が力を勞すまじけれども、水中の事は我們甚た不熟溜なり、汝等は原來慣水に達せり、因て汝等に水中へ下らん事を要むる所以なり。沙僧が曰く、小弟水中に往く事は易けれども、只水底の事何とか有らん是を知らず、三人一齊往きて見きたらん、但し往々駄著して捉へられし者、先妖怪の巣穴へ至り師父を尋れんと約定めんは如何。行者聞きて、賢弟がいふ處有理、さらば駄著せんとて打連れて水底に走り下り、行く事百餘里に及ぶ。那獸子行者を追うて捉へんとしければ、行者早く一根の毫毛を拔いて變じて假の妻となし

置き、本身は一個の猪虱子となり八戒が耳朶の裏に緊しく貼着き居たり。八戒案に違ひて沙僧に對ひ、所詮他に莫管、我汝と往きて師父を尋れん。沙僧が曰く、不好、他水性を不知といへども、我等に比べては乖巧なる事勝れたり、もし他來る事なくんば我汝と往くとも益なからん。行者、八戒が耳朶の裡に有りて忍へかれ、高く呼はりけるは、悟淨、老孫這にあり。沙僧驚き八戒を喝つて曰く、汝猥に師兄を捉へんとせし故他形を隱せり、今聲のみを聞くとも像を見ずんば怎の好き事かある。八戒慌てゝ泥の裡に跪下いて曰く、哥々我過てり、願はくは師父を救ひ岸に上りて後陪禮せん、請ふ本身を見せよ。行者が曰く、汝等憂ふる事勿れ、我汝等が身上に在り、只速に水底に下れ。兩人是を聞きて又進み行くこと百餘里。忽ち一座の樓臺あり。臺上の牌位を見れば水龍之第と云ふ四個の大字あり。沙僧が曰く、這壁廂是妖精の住所ならむ、我個二人門に上りて戰を索めん。行者聞いて曰く、悟淨、那門の裏外水ありや。沙僧が曰く、更に水なし。行者心を安んじ、水なくんば汝等左右に隱れ居よとて八戒が耳朶の裡を出で、身を搖り一變して長脚の鰕婆となり、跳つて那門の裏に入り睜眼ろに、那妖精上面に坐して、多少の水族ども兩邊に擺列り、班衣鰕婆傍に坐し、唐僧を喫ふべき商議す。行者よく〳〵其邊を看回せども更に三藏の

在さゞれば、暫時伺ふ所、忽ち一個の大肚の蝦蟇きたり、徑に西の廊下に立定り。行者頓て他が面前に跳り至り問ひけるは、大王今衆と那唐僧を喫はんと議り給ふ、怎や唐僧は今那里に在りや。大肚の蝦蟇答へて曰く、唐僧前に大王が降雪結氷の計にあたり、捉へられて後宮の石匣にあり。行者是を聞きて徑に尋れて後宮に到り見れば、果然一個の石匣あり。只聞三藏石匣裡にありて嚶々と哭く聲あり。行者耳を傾け再度聞けば、三藏悲愁の裡に一聲の恨を說いて曰く、我娘々の胎腹を出でしより若干の災害に遭ひ、近くは黑河に沈みて死せんとし、今又氷解くるに逢うて性命已に黃泉に皈せんとす、今は徒弟等きたりて救ふ事も能はじ、悲いかな、遂に佛を拜し經を求めて故園へ皈ることを得ずと聲を放つて哭きければ、行者忍不住て曰く、師父水の災を恨む事勿れ、既に經に說かずや、土乃五行之母、水乃五行之原と、土なき時は萬物生ぜず、水なければ萬物長ずる事能はず、老孫きたる上は望慮し給ふな。三藏這言を聞いて曰く、徒弟早く我を救へ。行者急に回頭して門外にいたり、本相を現して八戒、沙僧を呼んで曰く、那妖怪、師父を騙了り石匣に捉へおけり、汝兩人早く戰鬪へよ、老孫は先水面に出で去らん、汝等他を捉ふる事能はずんば、伴り敗けて他を引いて水中をいでよ、我他を捉へんと分付け、

躬は避水の訣を結んで河中を潛り出で、岸の邊に停立みて專ら其音信を待つ。八戒、沙僧は妖怪が門前に到り、聲を勵して曰く、潑怪早く我が師父を送り出せと。門裡の小妖急ぎ入りて斯くと告げゝれば、妖怪が曰く、是定めて那潑和尙の來れるならんと、早く兵具を披き掛け手に一根九瓣の赤銅槌を執つて、門を八文字に開かせて突然と出できたり、八戒に對して、眼を瞋して曰く、汝潑和尙何の爲にか這に到りて喧嚷きや。八戒大いに喝つて曰く、汝這打不死の潑物、前夜我と頂嘴ながら尙不知、また來つて問ふか、我は是大唐の聖僧の徒弟なり、汝虛頭を弄び假に靈感大王となり、もつぱら陳家の庄にありて每年童男女を喫ふ、我は是陳濟が家の一秤金なり、汝認不得やと罵りけり。妖怪が曰く、汝潑和尙、前に變じて一秤金となり、冒名頂替の罪を犯せり、されども我恕して喫はざるに、却つて我が手の甲を破り、今又來つて門を騷がすは、生に飽いて敢て死を要むるか。八戒奮然として色を起し、汝風雪を弄して我が師父を捉ふ、速に送り回さば性命を饒さん、然らずんば眼前に命を斷たんと罵る。妖怪是を聞きて大いに怒り、那銅槌を揮つて蒐れば、八戒も鈀を上げ一往一來して須臾鬪ふ。沙僧、妖怪の痺まざるを見て、又寶杖を擎いて兩方より挾み、三個水底に有りて鬪ふ事二時ばかり。更に勝敗を不分。八戒伴つ

て、不能嬴他と云ひて沙僧に屹と丟個眼色し、兩個一齊に兵器を挽いて回頭せば、那妖怪遁さじと追ひかくる。此時孫行者東岸に有りて眼不轉睛して水面を看居たるに、只看る、河邊の波浪翻騰り喊の聲天地に號ぶ間もあらず、八戒、沙僧おもふ圖に敵を引寄せ、跳つて岸に上り、妖怪を蹤下き來了來了と欺くにぞ、妖怪大いに憤り水面に跳りいづる。行者見て大喝一聲して曰く、汝潑怪、我が師父を困しめぬ、速に這一棍を喫へと鐵棒を輪して打つてかゝれば、妖精、心得たりと銅槌をもつて急架めつ、戰未だ三合ならざるに那妖魔敵しがたく、回頭して水中に敗れ退きける。行者今は詮方なく、高岸に回轉し、八戒、沙僧に曰く、兄弟多く辛苦せしかな、されど妖怪早く逃げ去つて捉ふる事能はず、今一度往きて戰を索め他を引いて出で來れ、我決して他を捉へん。兩個是に順ひ再び水中に赴きけり。却說那妖精は行者に敗績けて回皈りければ、衆妖、宮中に接到け、中にも鰲婆近く上前みて問ふらく、大王那兩人の和尚を赶うて那方に到り給へる。妖魔答へて曰く、我那和尚等を赶けて岸に到りしに、忽ち又一個の和尚有りて一條の鐵棒を輪して打つてかゝる、我他と戰ひ、銅槌を以て架住むるに他が棒の勁重量りがたし、いまだ三合ならずして敗げ回れり。鰲婆大いに驚き、大王、那和尚是何やうの相貌なる事を記得給ふか。妖怪が曰く、我能く認得り、毛臉雷公のごとく、火眼金睛の和尚なりと語るを聞き、小妖の裡より寒禁といふもの進み出で、曰く、大王幸にして性命を全うし給へり、もし再び戰ひ給はゞ生き給ふ事能はじ、小的當年東洋大海に有りて老龍王の說きしを聞くに、五百年前大いに天宮を鬧せし齊天大聖といふ者、今佛敎に皈依し、唐僧を保けて西天に到り經を要めんとす、名を改めて孫悟空といふ、他神通變化測なく、向ふ處魔を降し妖を捉ふと、他和尚就ち孫行者ならんといふを聞き、那妖王戰々兢々色を失ふ處に、忽ち門裏の小怪走りきたり、前の二和尚又門外にきたりて戰を索めぬと報げゝれば、妖怪、群妖に令し、汝等緊く門を鎖し、如何喧嚷くとも門を開く事なかれと分付けゝれば、小妖一齊に石頭泥塊を把つて門を塞ぎ止む。斯くとも知らず八戒、沙僧、妖怪出で再び勝負を決せよと叫べども、敢て一人も出で戰ふ的なし。八戒忍へかねて鈀を擊いて門の扉を搖き破り、裏を見るに、石塊を高く疊んで裡に入るべき便なし。沙僧が曰く、妖怪懼怕れて不出會、再び哥々と計較せんと、兩個すごゝ東岸に回り行者に對して斯くと告訴ぬ。行者聞いて、如此くにては無方可治、汝兩個は此に待て、我普陀巖にいたり菩薩に計策を問ひ奉らんとて、急に觔斗雲に駕して半時ならず南海に至り、雲を下りて普陀巖に到れば、衆神迎へて曰く、菩薩

今早洞を出で給ひて獨身竹林の内に入りて翫し給ひ、大聖今日きたることあらんとて、我等に分付け玆に在りて窺はしめ給ふ、汝翠巖の前に坐して片時待ち候へ、菩薩自ら來り給ふべし。行者其言に隨ひ坐して待つに、那善財童子出で來り、行者を見て進んで禮を施し、孫大聖、前には蒙盛意、幸に菩薩に奉仕へて左右を不離、甚だ善慈を蒙れり。行者紅孩兒を見て笑うて曰く、汝前には寃行に心を迷はせしが、今正果に皈して老孫が好人なるを知りつらんと語るうちにも行者久しく菩薩の來給はざるに心焦燥ち、諸神の制するをも聞かず竹林へ走り入り見るに、菩薩は獨柴竹の林に坐し、いまだ纓絡をも戴かず、藍袍をも掛け給はず、玉手に鋼刀をとつて竹皮を削り居給へり。行者近く進み志心朝禮して曰く、今師父、通天河の妖怪の爲に捉へられ性命を斷れんとす、願はくは慈を垂れて救ひ給へ。菩薩の宣はく、汝外面に退き出で、我が往くを待て。行者領掌して竹林を走り出で、諸神に問うて曰く、菩薩今日蓮臺に坐せず妝飾も穿給はず、竹林に入りて竹皮を削ぎ給ふは甚事にや。諸天曰く、我等曾て其故を不知、只我等をして此所に大聖を接候へしめ給ふ、必然深き道理あらん。行者待つ事不多時にして、只看る、菩薩手づから一個の竹籃兒を提げて出できたり、宣はく、如何行者、我と汝と俱に行きて唐僧を救ひきたらん。行

者跪下いて曰く、弟子敢て催促ぐ事なし、菩薩まづ衣を穿坐に登り給へ。菩薩宣はく、只此僅行かんとて、祥雲を放つて空に上り給へば、大聖も觔斗雲に駕して頃刻の間に通天河に至る。八戒、沙僧、觀音を見て禮拜すれば、菩薩即ち絲繩をもつて籃兒を結ひ付け、絲を提げて雲端に立出で、河中に抛げ入れ、口に念頌を七遍となへて籃兒を引き揚げ給へば、只看る那籃兒に灼々たる一尾の金魚有りて。轉眼動鱗きたり。菩薩、行者を呼び給ひ、快く水中に下つて汝が師父を救へと分付け給ふ。行者が曰く、未だ曾て妖怪を拿へずして如何して師父を救ひ候べき。菩薩宣はく、這籃兒の裡なるは即ち妖怪なり。行者其故をさらず、拜して又問ふ。這魚何の妖怪に候や。菩薩曰はく、這我が蓮池の裡に養ひ置きし巨いなる金魚なるが、日ごとに頭を浮べて經を聞き、頗る神通を修成へり、那一柄九瓣の銅槌は乃ち是一根未開蓮花、他が運煉に依て兵器となる、或日海潮泛漲り池を出で、這河に來り、成積て妖王となり汝が師父を害せんとす、故に梳妝もせず竹籃兒を織りて他を擒へたり。行者聞きて感嘆し、已に如此くならば片時待ち給へ、我等陳家の衆人を呼んで菩薩の金面を拜ませ、一つには恩を留め、二つには妖怪收治の事を說き候はん。菩薩點頭き給ひ、汝早く往きて呼び來れと指揮し給ふ。行者雲を跳り下り、陳氏が家に走り行き、

汝等早く來つて活觀音菩薩を拜せよと呼はれば、陳清、陳澄を始め一莊の老幼男女大いに悅び、足を空に馳せ走り、泥の上、水の中とも云はず跪下いて掌を合せ禮拜す。其中にも圖畫者ありて影神摸寫す。末世に傳ふる魚籃觀音の像是なり。斯くて菩薩南海に回り給へば八戒、沙僧は水路を開きて那水龍之第に到り見るに、那裏邊の水怪魚精悉く爛れ死せり。兩個徑に後宮に入りて石匣を揚げ開き、唐僧を駄ひて波津を出で岸に登りくれば、陳清兄弟頭を叩きて地に拜伏す。行者兄弟に對ひて曰く、汝等聞け、那里今より祭を不用とも、那大王の除根ちたれば再び災なからん、汝等其恩をおもはゞ、快く一隻の船を索めて我等を送つて河を過せよ。陳清兄弟大いに悅びて曰く、願はくは新に船を造り送り奉らん。衆客是を聞きて我は桅を買はん、我は篙槳を辨ぜん、或は水手を雇はんとて勇み鬧ぐ所に、忽聽河中に聲有つて、大聖船を造らせて人家の財物を費し給ふな、我唐僧師徒を送つて河を過さしめんと呼ぶ。衆人是を聞きて心驚き見るに、只看る、水中より一個の妖精躰み出づ。是紛蓋癩頭の黿なり。行者屹と見て鐵棍を揮り上げて曰く、我汝が如き孽畜を禁むるを快とす、もし近著きなば一棍の下に打ち殺さん。老黿、行者が面を見て曰く、我汝が恩澤を感じ、情願んで唐僧師弟を駄ひて河を渡さんとするに、怎麼ぞ却

つて我を打たんと云給ふぞ。行者詞を和げて曰く、我汝に對し甚の恩惠かあるや。老黿泪を流して曰く、大聖いまだ知り給はじ、這水底にある所の水龍之第こそ原我的が住宅にて、歷代祖上より傳流へしに、那妖怪九年前の海嘯波翻の時潮頭を赶りて這所にきたり、兇頑を逞うして我と爭鬪ひしに、我運拙く他に傷られ、我が多少の兒女眷族悉く鬪ひ敗け、巢穴殘らず他に奪はれぬ、然るに今大聖這にきたり、菩薩を請うて妖精を收め給ふにより、第宅また我に回れり、我今舊舍に住む事を得る大恩丘山のごとし、且我等が歡喜のみにあらず、這莊の人々も年々の祭饗に牲を拿らるゝ事を免れたるは、實に一擧兩得の恩惠なりと說きければ、行者暗に悅び、鐵棒を收め、汝が今いふ所眞情ならば、朝天ひて賭咒をたてよ。老黿是を聞きて紅口を張り、天に朝ひて發誓うて曰く、我唐僧を送りて此通天河を過さずんば身化して血水とならんと。玆に於て行者疑念を晴らし、汝快く上來々々と云ひければ、老黿身を一度縱し河岸に爬れ上る。衆人近着いて是を見るに、周圍四丈ばかり有りて、一個の大白蓋の老黿なり。行者、三藏にむかひ、師父他が甲に乘つて這河を渡り給へ。三藏が曰く、徒弟等厚き氷の上を行くさへ尙遽迫とせり、況んや這黿背に乘つて渡らん事恐らくは穩便ならじ。老黿聞いて曰く、長老心を放し給へ、妖怪

が偽氷に比べては我が背上遙に穩ならん。行者が曰く、師父平素に凡衆生の會説にも誑語をいふ事を誡め給ふ、老龍已に天に誓ふ、何ぞ誑を申すべき、八戒、沙僧、快く馬を引きたつて師父と俱に他が背上へ乘れ。三藏漸く心を放しければ、陳家の老幼男女とも厚く謝して拜送りまゐらする。行者は馬を曳いて白龍が蓋の上に乘り、唐僧を請うて馬の頸項の左に站かしめ、沙僧は右に站き、八戒は馬の後に站き、行者馬の前に站けば、老龍水中に這入り足を開き流水を踏む事平地を行くがごとし。東岸の衆人は是を見て、香を焚き叩頭して南無阿彌陀佛と念じ、禮拜して望むに、はや形影見えずなり行けば、各家に回り去りぬ。斯くて三藏師弟は白龍に駕着て行くに、早き事疾風のごとく、八百里の急流を纔一日に行きて終に通天河の西岸に着きぬ。三藏等岸に登り謝して曰く、老龍汝を累す事甚し、さればとて贈るべき物もなし、我經を得て回るまで、必ず厚く恩を謝せん。老龍が曰く、師父の賜謝を受くる心なし、小的うけたまはる、西天の佛祖は滅ぬる事もなく生きたるにてもなく、能く過去未來の事を知り給ふとかや、我這河に在りて修行する事一千三百餘年、然りと雖も延壽く身も輕く、人の語をも會説へども、只恨むらくは畜生道の本殼を脱げがたし、萬望長老西天に到り給はゞ、我いつか這畜生道を解脱れて一個

の人身となり得べきや、只此事を佛祖に問ひ奉り給はり候へとぞ願ひける。三藏點頭き、我汝が爲にこれを問ひ奉らん間、我が回るをまてといふを聞き、老龍歡喜びて遂に水中に沈み去る。三藏師徒は是より大地を一直に西を望んでぞ急ぎける。

五〇　情亂性從因愛慾　神昏心動遇魔頭

話説三藏師徒四個、西に從ひ行き〳〵て又嚴冬の時節にいたる。然るに前路に一座の大山ありて、路峯く崖高うして人馬行惱む。三藏韁繩を住め徒弟を呼んで曰く、汝等前面の山高きを見よ、恐らくは虎狼の害あらん。行者が曰く、師父心を放し給へ、我等兄弟三人意を合せて師を保護れば、何ぞ虎狼を怕れん。三藏聞いて纔に放心し、雪を冒して戰澌々進み行き、巔峯峻嶺を過ぎて遠く見やるに、只看る、山の凹なる中に樓臺高く聳え房舍清幽なる有り。三藏が曰く、斷して是人家寺院あるなるべし、汝等道を急ぎて些の齋飯を請ひ飢を扶けて再び走れよ。行者聞きて屹と睛看に、那壁廂兇雲隱〻として惡氣紛〻たり。行者頭を回して三藏に向ひ、師父猥に往き給ふな、那邊是好所にあらず。三藏が曰く、樓臺房舍あるを見ながら好所にあらずといふ

は何故ぞ。行者が曰く、西方路上多く妖怪あり、能く〳〵莊宅を點化せずんば禍あらん、老孫那壁廂の氣色を見るに、恐らくは妖魔の巢穴ならん。三藏が曰く、已に斯のごとくなれば我實に飢ゑたり、今是を奈何かせん。行者が曰く、師父飢ゑを給はゞ且く馬を下りて此處に坐し、老孫が他に去つて齋を請ひ回るを待ち給へ。三藏是に隨ひ馬を下れば、沙僧は包を解いて鐵鉢を取出し行者に遞與す。行者是を請取り三藏に向ひて曰く、師父這所を去り給はゞ吉は少く凶多からん、斷乎身を動かし給ふな。我假に安身の法を布かんと、金箍棒をとりて平地に週圍と一筋の圈子を畫いて唐僧を中間に坐せしめ、八戒、沙僧を左右に侍はせ、師徒に對ひ、我が畫きたる圈相の中こそ銅墻鐵壁に比し、いかなる虎狼魔鬼なりとも敢て近着く事能はじ、もし圈外に走り出づる時は忽ち災害あらんと誡めければ、師徒其詞に順ひ端然として坐下りける。行者は雲頭に上り、人家を尋れ齋を請はんと南に向ひ飛び行くに、只看る、古樹天に參り一起の莊舍有りければ、急き雲を按下て見るに、柴の扉を開き一個の老者藜の杖を挽いて出できたり、天を仰ぎ見て獨言に曰く、西北の風起れり、明日必ず晴天ならんと、云ふこと了らざるに後邊より一頭の狗兒來りて行者を望着け汪々と亂吠きぬ。老者頭を回らして行者が鉢盂を捧げたるを見、何人なりやと尋

れければ、行者答へて曰く、我は是東土大唐の者なるが、欽差を奉け西天に往きて佛を拜し經を求むるなり、然るに我が師父今飢ゑに臨めり、故に特尊府にきたりて齋を募化候なりと語りければ、老者聞いて曰く、長老是錯てり、西天に往くは這眞北に大路あり、我が此里にきたれば千里の違あり、早く回りて大路を行くべしと敎ふ。行者笑つて曰く、我が師父已に北の大路にありて我が齋を請うて回るを待てり。那老者惘れし面色にて曰く、這和尙多く亂談をいふ事勿れ、汝が師父大路に有りて飢ゑたるに、汝が這千里の遠きにきたり齋を請ふを待つとも六七日をも銷しつべし、然らば師父何ぞ餒ゑ疲れざらんや。又行者笑つて曰く、凡人は六七日をも過すべし、我は尙一盞の茶の冷めざる間によく回ることをなす、今齋を請うて師父の午齋に供へんとすと云ひければ、老者大に怕れ、這和尙必ず鬼ならんとて裏に向ひ逃げ入らんとす。行者扯き住めて曰く、施主怕る事を休めて些の齋を惠めよ。老者が曰く、さりとては不方便なり、我が家既に六七人口にて纔に三升の米を睟ぎて下鍋と雖もいまだ不煮熟、別處に行きて請へよ。行者が曰く、古語にも三家に走るは一家に坐するに不如とか、我這に在りて飯の熟みるを待たん。老者、行者が衣に纏得き放さゞるを怒り、藜杖を上げて丁々と打つ事七八下。行者自若として更に怕れず、笑つて曰く、

老官兒、杖の數を記得候へ、一杖擊たば一升の米を請はん、二杖擊たば二升の米を請はん。老者是言を聞いて急に杖を手つて跑進去し、門を關しかため、有鬼有鬼を嚷きければ、一家の男女大いに慌て前後の門を關す。行者此躰を見て心中におもへらく、這老賊米を睟ぎて下鍋といへり、不知是虛か眞か、我往きて看んとて隱身の法をもて忍んで厨中に入りて見るに、果然鍋の裏に飯氣騰々りて煮えければ、暗に蓋を把つて飯を鉢盂に盛り、雲に跳り上つて回りきたる。是より先三藏師徒は、圓相の中に坐し待つ事多時なりしが、行者久しく回りきたらざれば、欠伸しながら望んで曰く、這猿子那里に往きて化齋するや。八戒嘲笑つて曰く、他那里ぞへ要子に行き、我等をして此坐牢に在らしむるならん。三藏が曰く、怎麼ぞ是を坐牢といふや。八戒答へて、師父知り給はずや、古人地に畫いて牢となす、他弱馬溫戲に這圈子を畫き、跨つて鐵壁銅墻といふ、もし今にも虎狼、妖獸のきたらば、如何ぞよく擋め得ん、只我等をして居ながら虎狼に噉しめんとするのみ。三藏が曰く、然らば汝怎の處置ありや。八戒が曰く、此間に在りては不藏風もなくて不可避冷、もし老猪が言に依ひ給はゞ路に着きて西に行かん。然らば弱馬溫が齋を請うて回るに會はん、如今茲に坐する事一會せば脚冷えて疾を發せん。三藏遂に獃子が言に迷はされ、一齊に圈の外に出で、路に順ひ歩行するに、一時ならずして樓閣の所に到る。元來是坐北向南の家なり。門外みな粉牆にて一座の門樓あり。都て五色に妝的れり。其門半は掩り半は開けり。八戒が曰く、おもふに這所は公侯の宅と覺し、門外更に人なきは裏面に在りて烘火くならん、師父茲に待ち給へ、我裏に入りて仔細を看、些の齋を請ひきたらん。三藏が曰く、汝事を愼めよ、猥に人家に冲撞る事なかれ。八戒が曰く、我禪門に皈してより豫め禮數を傲へり、那弱馬溫に比し給ふ事なかれとて、鈀を拿つて腰に收め、青布の直裰を整へ、走りて門裡に入れば、只看る、三間の大廳あり。簾櫳高くかゝげいと靜にして全く人の居るけはひなければ、屏門を轉りて進み行くに又一個の穿堂あり。堂の後に一座の大樓あり。樓上の廳格半開き一頂の黃綾の帳幔をかけたり。獃子獨言に曰く、かゝる好舍に人のなきこそ怪しけれ、定めて寒さを怕れ內房に潛むならんと、內外を憚らず歩みわたして樓上へ上り、帳幔を掀開き見るに、裏に象牙の牀あり。牀の上に一堆の骸骨あり。恰も巴斗の大さにして腿骨の長さ四五尺もや有るべく見ゆ。八戒俄に哀を催し泪を落し、那髑髏に向ひて曰く、不知汝は是那の代那の朝に仕へたる元帥の體ぞ、おもふに是國忠の爲に身命を拋ち、王道を興し霸業を定めたる人ならんに、英雄豪傑の

魂は今何處に皈するやと、已獨合點して只管に哀がり、阿彌陀佛〳〵と念ふるに、幌幔の透間より燈の光さしければ、扨は侍奉香花の人有るならんと轉歩きて見るに、燈と見えしは窗屏より透す月影なり。其壁廂に一張の卓子ありて、卓子の上に幾件の錦綉綿衣ありければ、這獣子初に感慨がりし心にも似ず、忽ち一點の慾心を生じておもへらく、天我に寒冷を凌がせんとて此綿衣を與へ給ふにこそと、不管好衣二衣三衣とり、悦び勇み樓を下りて、徑に門外へぞ走り出でける。斯くて八戒は師父に見えて曰く、這屋更に住める人なし、但し樓閣の幌の裡に一具の骸骨あり、是をもつて見れば、亡靈の屋にやはべるべき、されども一個の造化は串樓の傍に此錦綉綿衣有りしにより取りてきたり候、此時天氣寒ければ、師父褊衫を脱いで是を底下に穿て冷さを免得給へ。三藏が曰不可々々、已に律に曰はずや、公取竊取皆爲盜と、もし人の知覺あらば、斷然是竊盜の罪を稱へん、快く往きて原所に搭在けよ、我等は此に在りて風を避け、孫悟空が回り來るを待ち同じく路を走らん。八戒が曰く、師父放心し給へ、四顧すにさらに人なし、誰か是を知る者あらん。三藏又曰く、汝聞かずや、暗室に心を虧くときは神目電の如しといへり、疾く疾く那所に回して非禮の物を愛する事なかれと誡めけれども、那獣子莫旨聽、却つて三藏を笑ひ、

師父穿給はずんば老猪是を穿て寒冷を防がんといへば、沙僧も冷氣に堪へかれ、我も一衣を着んとて再個ひとしく上蓋の直裰を脱ぎ了てかの綿衣を着し、已に帶をせんとするに、只看る件の綿衣忽然として幾條の繩と變じ、兩個が四肢を綁縛り綑めたり。是に依て八戒、沙僧、撲的一跌て起つ事能はず。三藏是を見て大いに忙て、兩個が綑めを解かんとするに、忽ち冤王きたりて唐僧を掻摑み、小妖を喚んで白馬、行李をとらせ、八戒、沙僧を曳かせて退く。三個は夢に夢見しごとく惘れ果てゝ倩見るに、今迄莊麗の殿宇と見えしも變じて妖怪の巣穴となれり。原來此所は冤の住處にて、行人を拿へん爲樓房と見せ、錦綉綿衣を置きしも一個の點化なり。斯くて妖冤は洞中に入り上面に坐して三藏を把つて投げ落せば、小恠早く地に推伏せて綑めたり。妖冤鏡のごとき眼を瞋らし、三藏に問うて曰く、汝那方の賊和尚にて、怎麼ぞ膽大く白日裏に我が衣服を偷盗みしや。三藏涙を流して曰く、貧僧は是東土大唐の者、欽差にて西天に往き經を要めんとす、然るに這里にきたり飢餒に臨み、徒弟をして齋を乞ひ來らしむるにいまだ皈りきたらず、曾て他が言に隨はず、誤つて仙庭にきたり寒風を避け、徒弟の回りを待ち候ひしに、不期も這兩個の徒弟、猥に衣物を拿り出して大王の機會に中れり、萬望慈憫をたれて我等を饒し西天に赴かしめ

給はゞ、永く大王の恩德を註し、東土に回りて千古に傳揚へ候はん。妖精呵々と笑つて曰く、我人の說を聞くに、もし唐僧を捉へて一塊の肉を喫ふ者は、髮の白きも黑くなり、齒の落けたるも更に生じ、不老長生ならしむとかや、今日招かざるに自ら來ろこそ大いなる造化なれ、何ぞ饑す事あらん、但し那齋飯を請めに行きし徒弟は名字を何と呼び何方に往きて化齋するや。八戒是を聞きて那を懼さんと稱揚して曰く、我が師兄は五百年前大いに天宮を鬧せし齊天大聖孫悟空是なり。妖魔是を聞き、心中些し怕を生じておもへらく、久しく那斷が神通廣大なるを聞く、今不期會はんかとて、小的をして唐僧師徒を後邊に繫ぎ置かせ、孫行者を防ぐ用意をぞ設けゝる。孫行者はかゝる事を夢にもしらず、南莊の人家にて一鉢の齋飯を把り、雲を踏んで舊路に回返し、徑に山坡の平なる所に至り雲を按下て見るに、我が棒にて畫いたる圈子は在りながら、唐僧師徒、馬、行李ともに見えざれば、彼里此方を回看せども更に見えず。那樓蠢と見えしも其形なく、只山根怪石のみ眼に遮れば、歎息して曰く、師父、我が禁誡を守らず、妖魔の毒手に落ちしならんと。急に馬蹄の跡をたづね、西に向うて行く事五六里に及ぶ處、前面より一個の老翁、甃衣煖帽を着し、手に一根の龍頭棒をもち、後邊に一個の童僕を跟着へ念歌うてきたるに

逢ふ。行者問うて曰く、老翁もし三個の和尚馬を引いて行くに逢ひ給はずや。老翁が曰く、前に三人の和尚路を錯つて往きしを見たり、一定妖怪の口にかゝりしならめ。行者が曰く、怎是何の妖怪にて、何方に住み候や、萬望老公知り給はゞ指南給へ、我其所に取索れ去かん。老翁が曰く、這山は金兜山と呼び、山の前に金兜洞あり、洞中に魔あり、名を獨角兕大王といふ、那者神通廣大にして威武高强なり、那三衆斷然他が爲に命を沒しつらん、汝もしたづれ行かばともに命を失はん。行者謝して曰く、老翁を多く勞せり、我豈師父を尋ねざらん、此齋飯は酬めん汝に與へんとて鉢を把つて移し與へんとす。老翁慌てゝ棒を捨て本相を現し双々んで跪下いて曰く、實は小神等は此山の山神、土地なり、茲に在りて大聖を候接け候なり、大聖法力を施して唐僧の難を救ひ出し給ふを待ち、此齋飯を唐僧に獻り、大聖の至恭至孝き給ふ心を顯さん。行者喝つて曰く、汝這旁貨、すでに我がきたるをしらば早く慇懃に迎ふべきに、却つて這般に頭を藏し尾を露はす擧動をなすは何事ぞ。土地怕れて曰く、大聖性急なれば犯威顏かと計り、像を變へて告げしらせ進らすなり。行者が曰く、汝等此鉢盂を收め預り、我妖魔を降し唐僧を救ひ出さば捧げきたれ。土地、山神遵領つて退き去る。行者虎皮の裙を拽起げ金箍棍を把つて徑に山

の前に走り到り、妖洞を尋れ山崖を轉り過ぐるに、只看る、亂石磷々として翠崖の邊に兩扉の石門あり。門外に許多の小妖ありて、鎗を輪し釵を舞ふ。行者走り進みて高く呼はり、小妖早く去つて汝が洞主に訊聞かせよ、我は唐僧の大徒弟孫悟空なり、快く師父を送つて洞を出せよ、さもあらば幾に汝等が一命を免しくれんと罵りければ、那小妖ども急に洞裏に入りて斯くと通報す。魔頭是を聞きて誇つて曰く、我本宮を離れ塵世に降りてより更に武技を試みず、今日他きたれり、必ずよき敵手ならん、いで汝等が眠を覺させんと、即ち小妖們に命じて一丈二尺の鋼鎗を取寄せ、群妖を隨へ門を八字に開かせて跳り出づる。行者是を見、進んで曰く、孫外公這に在り、汝潑怪我が師父を捉ふ、快く送り回して罪を謝せよ、もし些にても遲滯ば其身死して葬る地ながらん。那妖魔嘲わらひ、汝大膽の潑猴精何の武技有りてか斯く大言を吐くや、汝が師父我が衣服を倫盗みたるゆゑに實に是を拿へ住けり、今已に蒸して喫はんとす、汝もし我と勢ひを比べ、只三合を鬪ひ得ば、唐僧等が命を饒さん、もし三合を合し得ずんば、汝も一樣に屠り殺して酒の肴とせん。行者口を開きて大いにわらひ、汝狂妖口を講くを休めて、逃げ走らず我が此棒を喫へといひさま擊つて蒐れば妖怪も鎗を輪し相迎へ、兩雄戰ふ事三十餘合、更に勝負を分たず。那妖魔、行者の棒法正しくし

て一點の破綻なきを見て不覺賞歎し、這老猴天宮を鬧せしも本事なりとて、鎗を以て小妖を麾き一齊にかゝれと下知しければ、小妖等各刀を拿り鎗を轉じ、行者を圍み十方より攻め立てけれども、行者公然として怕れず。如意棒を使ひ、前に迎へ後に架け、西に除ひ、東に攔りて戰ひけるが、那群妖も敢て退かんとせず、命を拋てゝ進み戰ふ。行者焦燥て金箍棒を取つて空中に丟起げゝれば、那棍變じて千百の鐵棒となり、さながら飛蛇奔蟒の如く空裏に盈ちて亂落ちければ、さしも勇みし群妖大いに駭き、魂飛魄散つて蜘子を散すがごとく、悉く洞中へ逃入りけり。妖王是を見て唏々と冷笑ひ。野猴无禮の手段をなすこと勿れとて、己が細巾より一個の圈子を取出し、空を望んで拋げ起げ、一聲叫ぶと齊しく、不測や千百の鐵棒原の一條となり、妖怪が手に落ち下る。妖怪早く圈子と棒を取り收めければ、行者大いに驚き、赤手空拳うして命からく逃げ退そく。茲において行者矇朧として主杖を失ふ、這正に、

道高一尺魔高丈　性亂情昏錯認家
可恨法身无坐位　當時行動念頭差

倘下回を看て分解給ふべし。

五一

心猿空用千般計　水火无功難煉磨

話説大聖空しく敗陣け、金兜山の後に坐して兩眼に怒涙を垂れて叫んで曰く、師父我が禁誡を用ひず、又此大難に遇ふ、今我主杖を冤に奪はれ、空拳にて怎の功をかなすべきと恨み憤ること多時なりしが、行者佐と心中におもへらく、那冤我を認得りて天宮を鬧せしも本事なりと云ひしをもつて考ふれば、一定天上の兇星、下界に降りて惡事を擅にするならめ、我上界に昇つて查勘せんと、急に觔斗雲に駕つて南天門より走り入り、靈霄殿の階下に跪下き、玉帝に拜謁し、金兜山の妖冤、唐僧を捉へ苦むる趣を奏し、願はくは星斗を查紙し給はり候へと啓奏しければ、玉帝駭き給ひ、急ぎ可韓司知道に勅して諸天の星宿神王の裡、下界へ下りし者ありや否やを查させ給ふ。可韓奉はりて滿天の星斗を查すると雖も、更に下界へ降りし者あらざれば、速に回りて斯くと回奏す。玉帝聞食し、斯の如くならば天將を選んで孫悟空に加勢させ、妖冤を擒にせよと誰那と評議あるに、托塔天王、哪吒太子に如くべからずとて、則ち那父子へ勅命の趣を傳へらる。天王父子、旨を奉け行者と面會して豫め計を定め、衆部の天兵并に九府天の鄧化、張蕃

と云ふ二人の雷公を引率し、徑に南天門を下りて頃刻の間に金兜山に降臨し、今日の先鋒は哪吒太子と定め、那二個の雷神は雲端に在りて太子と妖冤の鬪ふ最中に雷捩を下し、味方の勢ひを扶け妖冤が威を拉ぐべしと已に商議決しければ、行者、太子を引いて洞門に進み大音に、潑妖快く門を開いて我が師父を還せと呼はつたり。小妖是を見て急に裡に入り、冤王に告げて曰く、孫行者一個の童將を領着れ、門外へきたり喧嚷き候と報じければ、冤王急に鎗を把つて門外に走り到り、那童男を看るに、相貌清奇にして勇壯また常人に勝れたり。妖冤冷笑ひ、汝は是托塔天王の孩兒哪吒ならずや、今何の爲我が門前に來つて旡禮をなすや。太子罵つて曰く、汝潑冤猥に暴惡を逞うし、唐僧を捉へ困害ましむるにより、玉帝の欽差を奉け特にきたれり、快く來つて我が劍に伏せよと呼はりければ、冤王大いに怒り、黄口の孺子何ぞかく大言を吐くやと、鎗を撚つて刺いて蒐れば、太子も斬妖劍を使ひて相迎へ、一往一來して挑み鬪ふ。行者時分はよしと急に雷公を呼び、早く雷捩を放つて太子の勢を援けよと令すれば、鄧化、張蕃の二雷、雲光を踏んで已に手を下さんとす。這時哪吒太子は妖冤の屈せざるを見て、身を一變して三頭六臂となり、手に六般の兵器を持ち、妖冤を斬らんと進めば、妖冤もまた變じて三頭六臂となり、手に三柄の長鎗を

拿つて抵住む。太子また降魔の法力を弄ひ、那の六般の兵器砍妖劍(ばけものをきるつるぎ)斬妖刀(けしやうのものをきるかたな)縛妖索(まをとばるなは)降魔杵(ばけものをくだくきれ)繡毬火輪兒(てまりほどのひのたま)斬妖劍(ばけものをきるたち)是等の物を把つて大いに叫ぶ事一聲すれば、那兵器變じて千萬もなくなり、恰も氷雹の散るがごとく、空にとられぬ驟雨かと疑はれ、紛々密々として妖魔を打たんとしけれども、那魔猶公然として恐れず、那白圍子を取出し、空を望んで拋起げ一喝すれば、聲に應じて六般の兵器悉く妖魔の手に入りぬ。太子大いに慌て詮方なく赤手振りて敗れ退けば、妖魔は圍子を收め兵器を奪ひて洞中へぞ回りける。鄧化、張蕃の二雷は此躰を見て力を落し、雲頭を按落りて太子と俱に山南の坡下に至り、各また商議するに行者が曰く、那厮が神通廣大なる上に、不測の寶貝を持つて、丟揚ぐると齊しく諸物を取收む、そも是を奈何せん。吒搭天王が曰く、所詮那厮を亡さんには水火にまくべからず。行者聞いて曰く、是甚だ理あり、老孫天に登りて熒惑火德星君を請ひきたり、火を放つて那怪物を燒き亡し、奪はれし兵器并に我が師父をも救はんとて、諸神に別れ雲に乘じて徑に南天門の内に至り、仔細を告げて火德星君を請ひければ、星君領諾ひて火部の神兵を隨へ、行者とともに金兜山に到り、

天王、雷公と相見し手配を定む。托搭天王が曰く、孫大聖また至りて妖魔を門外へ釣出し給へ、那厮出できたらば我他と戰ひを交へん、其時火德星君衆を率ゐて他を燒き亡し給へ。衆尤もと同じ、卽ち行者洞口に到りて、妖魔出でよと罵りければ、那魔王衆妖を引率し、迅風の發する勢にて洞口に躍り出でゝ曰く、汝這潑猴、また何の兵を請ひきたるや。といふ事未だ終らざるに、托搭天王眼を怒らし大喝して曰く、潑魔頭我を認得れりや。魔王笑つて曰く、汝托搭王、我が面前へきたるは汝が令郎の仇を報じ、兵器を取返さんとするや。天王が曰く、一つには仇を報じ兵器を奪ひ回し、二つには汝が首をはね唐僧を救はん爲なり、汝走らずして我が一刀を喫へ。妖王冷笑ひ、長鎗をとつて相迎へ、兩個洞前に在つて戰ふ事多時。行者時分はよしと火德星君に令しければ、星君諾して衆の火神をして一度に火を放たしむるに、妖王火の來るを見て些も恐れず、那の圍子をもつて空を望んで投げ起ぐれば、寶貝は鳴り響いて火德君が使ふ所の火龍、火馬、火鴉、火鼠、火刀、火箭等を悉く取つて收め、勝利を得て洞中へ引退く。火德君は憫れて一桿の空旗を把つて衆將を招き返し、天王、行者と會合して再度評議に及ぶ。衆神が曰く、凶魔既に火をも恐れず、此上は如何なる謀をか用ひん。行者が曰く、他今火を恐れず、察するに水を怕れん、

我再び天に昇り、水德星君を請ひ來りて水勢を施し、他が洞裏に大水を灌ぎ、魔王を浸し死し、奪はれたる器物を取還して汝等に遣し、師父を救はん。衆是に同じければ、行者また觔斗雲に駕りて徑に北天門にいたり、烏浩宮に入りて水德星君に謁し、妖魔が凶勢を說き、何卒我が力を扶け妖魔を降して、師父の難を救ひ給へと憑みければ、水德星君領掌し、卽時に黃河の水伯に命じ、汝等我が盆兒を把つて黃河の水を汲み、大聖に隨つて魔を降せと令す。行者訝り問うて曰く、那盆兒何許の水を盛り候や。水伯答へて曰く、此盆兒よく黃河の水を盛り盡し候。行者悅び、水德君に別を告げ立出れば、水伯は盆兒を把り、黃河の水を半盆汲んで行者に跟ひ金兜山に着す。行者水伯に命じて曰く、我洞口に往きて呼はらば、妖魔一定門を開いて出できたらん、其時汝等門の裏に入り、一度盆兒を倒して洞中の群妖を殘らず淥殺せよと命ずれば、水伯是に隨ひ、行者に緊隨ひ進み行く。行者は例の洞門に到りて、滌魔快く門を開けよと呼はる。獨角兕大王是を聞きて、那寶貝を帶び鎗を綽いて走り石門を開く所を、水伯得たりと盆を把つて門內に向ひ一度覆せば、忽ち洪水門內へ漲り至らんとす。魔王水のきたるを見て那圈子を取出し、二扉の門をさし固むるに、只看る那水骨都々々と鳴りて門外へ溢れ出る。行者驚き、急に觔斗雲を縱ち水伯と俱に高峰

に跳り上る。天王父子、諸神等、初より半空に在りて觀居たるに、那水波濤泛漲溢れければ、行者水伯に向ひ、水已に妖洞に入る事能はず、却つて四野に漫らば、民田を淥し荒して萬民の憂患をなさん、早く收めよと命じけれども、水神頭を搔いて曰く、小神水を放つ事は得たれども、却つて水を收むる事を會得せずと辭す。行者惘果て奈何せんとおもひ煩ふ所に、原來那山高峻ければ水は只低きに走り流れて須臾の間に四方の澗壑に皈したり。然るにかの洞外には幾個の小妖跳り出で棒を弄ひ鎗を拈つて蝟のごとく喜々としてわらひ要子みければ、行者腹にすゑかれ憤怒を發し、隻手の握拳を揮り回し、喚いて洞門の前に馳せ到れば、小妖們驚き騷ぎ早々門內へ跳り入り魔王に斯くと報げゝるにぞ、妖魔例の鎗を提げ門を出でゝ曰く、道小猴幾度か我に鬪ひ負けながら、耻辱をもとらず又來つて何事をかせんとするや。行者大いに怒り、汝滌魔きたつて孫外公の一拳を喫へと呼はりければ、魔王大いに笑ひ、汝が拳頭は只核桃の大さに似たり、望みならば拳の勝負せんとて長鎗を投げ捨て、衣を撩げ進み寄り、兩個拳を上ぐるを見るに、さながら二個の鐵槌の如し。斯くて行者と妖魔互に拳勢を逞しうして擊合ひければ、衆神是を見て一齊に進み行者を助くれば、洞中の群妖も旗を搖かし鼓を搖つて一度に進み來る。行者は妖魔に勝ちがたきを測

り、毫毛を一把拔きとり空を望んで撒し起ぐれば、即ち變じて三五十個の小猴と做り一擁して那妖魔を纏住き、腿を抱き腰を引き眼鼻もわかず搔きければ、妖怪大いに慌て急に圈子を把り出す。行者も諸神も他が圈子を弄ふを見て、急に走つて高峰へ退き逃る。妖魔も圈子を拋起げ小猴を悉く取つて收め、兵を領し洞中へ入り、緊く門を鎖したり。行者衆神と商議し、那魔よく圈子を使ふ、奈何してか勝つ事を得ん。托搭天王が曰く、若他に勝たん事を要めば、那寶貝を奪ひ然して後擒にすべし。行者が曰く、然らば老孫忍び行きて偷みきたらんと、徑に峰頭を跳下り、暗に洞口に至り身を搖して蒼蠅と做り、飛んで門内に入りて見るに、衆の小妖兩邊に排列び、老魔は高く臺上に坐して蛇肉、鹿脯、熊掌なんどをならべ、悞み笑ひて酒を飲み居たり。行者仔細に窺へども那寶貝を見ず。そも何方に置きぬらんと轉つて臺の後に至り見るに、後の廊上に火德君の使ひたる火龍嘯き火馬嘶き、那金箍棒を東の壁に掛在けたり。行者大いに悅び鐵棒をおつとり、原身を現し走り出づれば、衆の小妖慌駭き上を下へと騷動す。老魔もおもひかけぬ事にて惘果て茫然たるひまに、行者は早く洞門を跳り越え高峰に回る。正是。

魔頭驕傲無二防備一　主杖還歸二與本人一

五二　悟空大鬧二金兜洞一　如來暗示二主人公一

話說行者は高峰に回りて洞中の趣を說し居けるに、只聞く、山坡の下に鑼鼓喧しく鳴り、喊の聲地に振ひて夥し。衆神驚き、何事にやと見るに、那兜大王衆の小妖を帥ゐて行者を趕けきたるなり。行者鐵棒を提げ走り向ひて、滌魔何里へ走るやと云ひ終らざるに、魔王罵つて曰く、賊猴頭怎麼ぞ白晝に我が物を偷み去るや。行者が曰く、這死業畜、汝こそ多く人の物を奪へり、敢て逃げ走らず老爺の一棍を喫へと叫び、擊つて蒐れば、魔王も鎗を輪して隔架し、戰ふ事八十餘回。さらに勝敗を分たざるに早く天色昏に向たれば、相引にして立別れ、魔王は小妖を帥ゐて兵を收め洞中に入り、門を緊々閉ぢたり。行者は高峰に回りて衆神に向うて曰く、那魔頭老孫と數十合鬪ひ、斷然疲倦れ眠るべし、我再び洞中へ忍び入りて他が圈子を尋れ出し、偷みきたつて後魔を降さん。衆神、是甚だ好しと同意すれば、行者鐵棒を耳裡に收め、高峰を跳下つて又洞口に至り、身を搖して一個の促織兒と變じ、飛んで門内に入り、壁根に蹲り裏を窺へば、燈光あたりを照らし、大小の群妖們、狼の喰ひ虎の噬むがごとく酒飯を喫著、少時ありて家什

を收めて都て寓舗を安排へ各眠に著く。約ふるに早二更の時分なれば、行者そろ〳〵忍んで後の房裏に到り窺ふに、那老魔令を傳へて曰く、汝等殿く洞門を看守せよ、恐らくは孫悟空甚麼に粧けて忍び入り偷み去らんも知りがたしとて、頓て石牀に衾を開きかけ、衣服を脱ぎ去るを見るに、左の脇膊に那圈子を緊しく結ひ著けたり。扨魔王衾を被りて睡りければ、行者又身を變じて黄皮吃蝨となり石牀に飛び上り、這うて衾の裏に入り那老魔が脇膊に近付き一口叮みければ、怪物身を翻し諡いて曰く、這些少の奴才めとて、牀を拂ひて寐れければ、行者は寶貝を偷みがたきを測り、牀を下りて又促織兒となり、房門を出でゝ後面に至るに、只聞く、火龍吟じ火馬嘶きぬ。那層門きびしく鎖をおろし、火龍、火馬すべて裏裡につなぎて有るが故なり。行者茲に至りて本身を現し、前門に進付き解鎖法を使ひ、門を推開けば、原來六種の火器相照して明なる事白日のごとし。行者頭を回らして四壁を見るに、東西兩邊に幾千の兵器を斜靠けたり。都て是太子の六個の兵器、火德君の火器なり。又一張の石の卓子の上に一つの盤兒有りて、一把の毫毛を放し置きぬ。是先に魔に取られたる毛なれば、大に喜び、拿り起げて兩口の仙氣を吹きかくれば、變じて三五十の小猴となる。即ち是に火刀、火箭、および太子が六件の兵器を把取たせ、其

身は火龍に跨り火馬を追立て、火勢を放ち裏外一齊に燒き立つる。其音烘々烈々として、さながら咋雷連砲の聲に似たり。洞中の群妖ども嚇ぼれ狼狽へ、走らんとするに路なく、火勢の爲に燒き殺さるゝ者大半に及べり。行者欣然として徑に高峰へ回りきたるに時尚三更に不過。是より前高峰には托搭天王、衆神と坐して行者が音信を待つに、忽ち金兜洞に火の光起りければ、列位一擁して押出すに、只看る、孫行者火龍に騎つて衆の小猴を從へ回り來るに逢ふ。行者、衆神に向ひ聲を勵して曰く、列位來つて兵器を收めよとて一喝すれば、衆の小猴忽ち毫毛と成り、行者が身に復りぬ。哪吒太子喜びて六件の兵器を收了むれば、火德星君も衆神に命じて火器を取收めしめ、只管行者が功を讃賀びけり。却説那金兜洞の裏は火焰紛々として天を焦しければ、兜大王大いに駭き、跳起きて房門を走り出で、双手に那圈子をとりて東に推せば東火滅し、西に押せば西火消す。滿空の冒煙突火云ふ許りなけれども、那寶貝を執つてかけ回る事一遍すれば四方の烟火總て消え、群妖を助け救ふ事を得たり。されども小妖大半燒き殺され、後面に置きし諸器悉くなし。只唐僧、八戒、沙僧、三人と白馬、行李は其儘にて有り、此のみ些の幸なり。妖魔憤つて曰く此火別人の放ちしにあらず、那の孫悟空又忍びきたりて我が寶貝を偷まんとせしかども、緊く抹

勒けしゆゑ手を下すと能はず、却つて兵器を盜み火を放せり、量らざりき賊猴に這條の手段あらんとは、されども那斷我が本事を知らず、千萬の機關を使ふとも我を降す事能はじ、我に此寶貝ある裡は大海に入りても溺るゝ事なく、火地に赴くとも焚けずと自負げて有りけるに、早鷄鳴き天曉けわたりぬ。此時高峰には、哪吒太子兵器を得て心勇み、行者を勸め諸神を引率して、再度金兜洞へ押寄せ、此度は是非とも妖魔を擒にせんと勇威を逞うす。行者徑に洞口に至り大音に、濱怪出で來りて老孫と三合を合せよと叫ぶ。小妖大いに恐れ、逃げ入つて斯くと報ずれば、兜大王例の長鎗を挺著げ寶貝を帶びて走り出で、喝つて曰く、汝賊猴度々无狀をせり、這般は斷然一鎗の下に刺き殺し、燒け死したる者の仇を復さん。行者嘲わらひ、鐵棒を輪して相迎へ、鬪ひを交ふるに、哪吒太子嗔を生じ、火德星君も神兵火部の者を令して妖魔を攻めさせければ、雷公は雷掮を放しかけ、托塔天王も刀を擧げ八方より採立てたり。されども妖魔事ともせず、袖中より暗に那圈子を取出し、空中へ拋げ起ぐれば、叫聲につれて神兵の火器、雷公の掮、天王、太子の刀鎗、孫行者が棍、殘らず取つて收めけるにぞ、衆神も行者も又空拳となり、這々の体にて高峰へ逃げ退く。妖魔全く勝利を得て洞中へ回り、小妖に命じて石を搬び土を動かして門を修造

し、緊しく防ぎ守りけり。話說金兜山の兜大王、不測の寶貝を帶びて兵器を收め取りければ、さしもの孫行者、諸天神も、更に那妖を降すこと能はず、殆もてあましけるが、行者又思惟を回らし諸神に向つて曰く、我おもふに、再び天に昇つて我佛如來に問はゞ、佛必ず慧眼をもつて大地四部洲を觀看し給ひ、這怪那方の妖魔にて、圈子は何の寶貝なる事を知り給ふべし、然らば那を降す事安からん。衆神是を聞きて尤もと同じければ、行者又觔斗雲に駕つて一瞬に靈山落下に至るに、忽ち祥光四方にたなびき、其中より人の聲有つて、孫悟空、唐僧を護つて西天に至らず、却つて茲にきたるは何事ぞといふ人あり。行者驚き頭を回して這人を見れば比丘尼尊者なり。行者禮をなして曰く、我這にきたる事、則ち唐僧の難を解かん爲如來に問ふ事有るが故なり。比丘尼が曰く、然らば汝怎麽ぞ寶刹に登らずして這に來るは何ぞや。行者が曰く、我初めて如來の在所へきたれば未だ路を志らず、幸にして汝に遇ふ、願はくば我を引いて如來の寶刹に行け。比丘尼承引し、遂に行者を誘うて雷音寺に到り、佛に拜謁して斯くと告げゝれば、如來、行者を近く召され問うて宣はく、汝孫悟空、前に觀音菩薩に命じ汝が身を解脫せしめ、唐僧を保けて此にきたり經を求むると聞くに、怎麽ぞ只獨茲にきたるや。行者頭を叩きて曰く、弟子、唐僧を保けて

多くの難を凌ぎ西に赴き候に、金兜山に至り一個の惡魔頭に逢ふ、名を兜大王と云ふ、神通廣大にして、師父と徒弟を捉へて洞中に苦しめ候により、弟子、諸天神をかたらひ苦戰する事數度に及び候へども、那怪一個の圈子を以て我等が兵器を把つて奪去り候ゆゑ更に降す事能はず、願はくは我佛如來慈をたれて、魔を擒にし唐僧を救ふ謀を示し給へと敬んで拜し求めければ、如來聞き給ひ、慧眼を以て遙觀し、早くも知識給ひ、行者に向ひ宜はく、那妖魔我是を知ると雖も猥に說破すべからず、我今十八尊羅漢をして寶庫を開き、十八粒の金丹砂を各一粒づゝもたせ、汝が力を助けしめて那魔を捉へしめん。行者大いに喜び恩を謝す。佛則ち十八衆の阿羅漢に命令を傳へ給へば、各領掌し、寶庫の裏より十八粒の金丹砂を取出し、一粒宛をとつて行者と俱に祥雲に駕り、多時ならずして金兜山に着く。天王、太子、是を見て勇み悅び、孫大聖早く妖王を呼び出し給へと勸むれば、行者頓て拳頭を捻り、洞口に到り罵つて曰く、滅怪出で來れと叫びければ、小怪等走り入りてく斯と報ず。魔王怒つて鎗をさげ寶貝を帶び石門の外に跳り出で罵つて曰く、賊猴幾番となく我に負け廻避りながら、又來つて眩惑くは何事ぞ。行者が曰く、汝滅物我が來るを怕るゝならば、降服して唐僧師弟を回し、懇懃に陪禮せば饒さん。那妖魔が曰く、那

三個の和尙すでに洗ひ淨めたれば、遠からずして宰殺し屠喫ひ、骸骨は汝に得させん。行者聞いて大いに怒り、拳を固めて擊つてかゝれば、妖王も鎗を綽いて撞いてかゝる。行者右に跳り左に跳りて忽ちくり繰り、頭を回して敗げ走る。妖魔は是を計とは知らず、趕うて洞口を離れ南にきたる。行者時分はよしと即ち羅漢を招きければ、羅漢半空の中より金丹砂を把つて妖魔を劈ひ一齊に拋げ下せば、妖怪飛砂を見て急に頭を低れて是を避くるに、忽ち足の下三尺餘の深さと成りければ、大いに慌得て身を跳らせ一層に浮上ば又二尺餘の深さとなる。益々驚きながら足を拔き出し、那圈子をとつて搬り上ぐれば、叫ぶ聲につれて十八粒の金丹砂を悉く奪めとり、步を回して本洞へ皈り去りぬ。羅漢は惘果て手を空うして雲の端に立つ。行者近く進んで問うて曰く、衆羅漢何ゆゑ金丹砂を降し給はざる。羅漢が曰く、他一聲叫びければ金丹砂悉く見えず。行者笑つて曰く、又是寶貝を拋げて奪ひ去りしならん。諸天神が曰く、那斷已に佛の力にも及ばず、今は何とかせんとおもひ煩ふ。然るに降龍、伏虎といふ二個の羅漢、行者に向ひ、如來我等に宜ひし事あり、妖怪もし神通廣大にして金丹砂を收めとらば、孫悟空に命じ離恨天に昇り、太上老君の所にいたり、妖怪が踪跡を尋れ問はしめば、一跛にして擒にすべしとの事なり。行者聞いて曰く、恨むべ

し〳〵、如來其時我に斯くと告げ給はゞ遠く羅漢を勞すまじきに、さらば太上老君に見えて事を糺さんと、身を搖して觔斗雲に駕り、直に南天門に入りて卅三天の外、離恨天兜率宮に到り、老君に拜謁して曰く、老孫唐僧を保けて西天に到り經を需めんとするに、一個の阻礙あり、因て老君に問ひ明めんとす。老君が曰く、西天の道の阻我何ぞ與り知る所ならんや。行者が曰く、老君の宮中に査あり、我改めんと裏面に入りて西に看、東に見つゝ幾層の廊下を過ぎ行くに、忽ち看る、牛欄の邊に一個の童子熟く睡り居けるが、青牛欄中にあらず。行者立回つて曰く、老君の青牛那里へ走り候や。老君大いに駭き、這業畜幾時走りしやと那童子を呼醒し、喝つて曰く、汝何ゆゑ眊睡りて牛を走らせしや。童兒頭を叩いて曰く、弟子丹房の裏にて一粒の丹を摺ひ服し候ひしが、其儘睡りて牛の走りしを知り候はず。老君が曰く、おもふに我前日火丹を煉る事七粒、過つて一粒を落したるに、汝拾ひて喫ひしならん、那丹一粒を喫はゞ眠る事七日に及ぶ、那業畜汝が眠りて人の看管なければ、下界へ走り去りしならめ。行者が曰く、業畜また寶貝を偷み去らずや。老君聞いて急に寶貝を查看するに金剛琢を見ず。老君駭き、那厮已に金剛琢を偷み去れり、大聖もし那が在る地方を知れりや。行者が曰く、現に那厮金兜山の洞に在りて唐

僧師徒を捉へ、其上一個の圈子を拋げて我が金箍棒を始め多くの兵器を搶れり。老君が曰く、那金剛琢は乃ち是我が魔を化するの器にして、幼きより煉成の寶貝なり、汝甚の兵器を憑むとも水火ともに能く近付く事なし、他もし我が芭蕉扇を偷み去らば、我も奈何ともする事能ふまじきに、是一個の幸ひなり、いざ汝と俱に至りて業畜を收めんと、芭蕉扇をとつて行者と俱に祥雲に駕り、徑に金兜山に降り著く。托搭天王父子、諸神、羅漢も是を見て迎へて禮をなす。老君、行者に令し、汝去つて他を誘ひ出せ、我よく他を收めん。行者領掌し、跳つて峰頭を下り洞口に到つて罵つて曰く、濕業畜快く出でゝ死を受けよと。妖魔が曰く、這賊猴又誰をか憑みきたりしやと、鎗をとり寶貝を帶びて門外へ走り出る。行者一言の問答もせず、飛びかゝつて妖魔の起臉を強く打り身を回して跑け出せば、妖魔暴燥し鎗を綽いて趕くる所に、忽ち高峰の上に聲有りて、我が牛兒久しく家に還らず、更に何日をか待つやと呼はる。妖魔頭を擡げて是を見るに太上老君なれば、心驚膽戰して曰く、這賊猴怎麼としてか我が主人公を憑みきたりしやと惘れ果てゝ停ちけるを、老君咒語を念へ、芭蕉扇をもつて一下搧げば、妖魔圈子を老君に拋回しぬ。又一扇すれば那怪力軟觔麻れて遂に本相を現すに、原來一隻の青牛なり。老君金剛琢に仙氣を吹

きかけて青牛の鼻子に穿し、袍帶を解きて是にかけ片手に牽き給ふ。今に到りて牛の鼻に拘兒を穿す事此故なり。斯くて老君衆神に辭し、青牛に跨り彩雲に駕りて、徑に離恨天へ回り給へば、行者は衆神と俱に洞裏に打入り、衆の小妖を盡く打ち殺し、諸神の兵器を把つて還し、勞を謝しけるにぞ、天王、太子を始め十八羅漢に至るまで悉く天に回り終る。其後唐僧、八戒、沙僧を解き放し、白馬、行李を取拾め、師徒四人、洞を離れて大路を尋れ道を急ぎぬ。

五三　禪主吞飡懷鬼子　黃婆運水解邪胎

時に路傍に聲有つて、唐僧們齋を喫して去れと呼ぶ者あり。三藏等其故をふらす。大いに怪み頭を回して是を見るに、即ち金兜山の山神、土地なり。紫金の鉢盂を捧げて曰く、是は孫大聖向化して請ひ得たる齋飯なり、長老、大聖の良言を聽かず、誤つて妖魔に捉へられ、多く大聖を勞し、稍く免るゝ事を得、此飯を喫して行者が孝恭の厚きを知り給へと申しければ、三藏泪を流し、我圈子の中を出でずんば殺身の害に遇ふまじきに、八戒が言に迷ひて死地に陷り多く徒弟を煩はせりと云ふ。行者、八戒を訶つて曰く、這獸子我が禁誡を信ぜず、師父を迷はして這

大難に遇はしめたり、老孫天を翻し地を覆して天兵と水火と我佛の丹砂とを請びきたると雖もなほ妖魔を降す事能はず、漸〳〵如來の根原を指示へ給ひしに依つて、纔に老君を請ひきたりて收伏げたり、以後かゝる禍を引き出さば、妖怪より先に汝を擊ち殺すべきぞと誡めければ、八戒頭を叩きて罪を謝す。三藏も深く行者が勞苦を謝し、四人那齋飯を喫するに尙熱氣騰々溫なれば、行者訝り、此飯汝に預けて多時なるに尙溫なるは何ゆゑぞと問ふ。土地跪いて曰く、小神大聖の功完を賞して溫めきたれり。行者其厚情を謝し、師徒快く喫し終り、鉢盂を收拾め、土地、山神に辭ひし、又西に向ひ風に飡し水に宿して行く事數月。また陽春の時節に逢ふ。然るに前路に一道の小河あり。水澄々とし波湛々たり。三藏馬を勒へて看れば、河の那邊に柳陰碧を垂れて微に茅屋幾椽あり。則ち徒弟に向ひて曰く、那人家定めて擺渡あらん、汝等呼びきたらして此河をわたれ。八戒聞きて行李を放下き高く呼んで曰く、擺渡的船を撑しきたれと連呼ぶ事四五聲に及びて、只看る、那裏面より一人の者出できたり、船兒を棹さして東岸に着け、旅客快く船に乘りて河をわたり給へと云ふ。三藏等馬を下りて近付き見るに、是一個の老婦人なり。三藏怪み問うて曰く、汝は是擺渡なるや婦人が曰く、貴意のごとく渡守なり。行者が曰

く、艄公は何ゆゑあらずして艄婆に船を撑さしむるは謂ばし有る事か。老婦微笑みて答へず。三藏師徒は白馬、行李を把つて船に乗り終れば、婦人頓て棹を揚げて西岸に着く。三藏師徒岸に登り、包を開き幾文の錢鈔を取りて他に與ふるに、老婦更に多寡を爭はず、纔を樹に拴在、嘻嘻と笑つて屋の裡へ入りぬ。三藏河水の清きを見て八戒に分付け、我今口渴けり、汝鉢盂を把つて些の水を汲みて來り喫せしめよといふにぞ、獃子が曰く、我もまた些喫はん事をおもへりと。直に一鉢を汲み取つて師父に與ふ。三藏些飲み、殘れるを八戒に與ふれば、獃子接來て只一氣に飲乾し、快々とて三藏に扶侍馬て行く處に、三藏馬上に有りて呻吟し、我甚だ腹痛すといへば、八戒も面を皺めて我も頻に腹痛めりと悶ゆ。沙僧が曰く、おもふに是冷水を飲みしゆゑならんといふうちより、三藏大いに聲喚び、痛み已に緊しとて馬上に悶え煩へば、八戒も路頭に臥轉び、疼痛に堪へかれ大聲に泣きかこち、肚を摸でるに漸々に肚子ふくれ大血團肉塊有るが如くなれば、驚き悲む事大かたならず。行者も沙僧もてあましけるが、前路に一村舍有りて樹の楮に兩個の草把を挑けたり。行者が曰く、師父暫時疼痛を忍び給へ、那村に酒賣る家有りと見えたり、老孫行きて熱湯を請ひきたりて勸め、且藥賣る者を尋れて買ひ求め腹痛を治せん。三

藏苦痛の中にも是を聞きて大いに悅び、徒弟に扶けられて村舍門口に至り馬を下りけるが、那門外に一個の老婆あり。坐して麻を績み居たり。行者進んで問ふらく、我們は大唐より西天に往く者なるが、前に師父と兄弟河水を喫し、肚腹張り痛む事甚し、汝藥賣る店あらば教へよといふ。老婆聞きて大いにわらひ、和尙們かの河水を飲みしとや、不好々々、先々家內へ入り給へ、解を說き聞かし進らせんと云ふ。行者聞きて、扨は仔細こそあらめとて、己は三藏を扶け、沙僧は八戒を扶けて入るに、兩個は聲々喚々肚子を押へ、面黃み眉を皺めて草舍の裡に坐す。行者、老婆に向ひて曰く、汝些の湯を焚いて我が師父に與へよ、我厚く謝せんと云へども、老婆は湯を焚かんともせず、裡に走り入りて二三人の婦人を呼びきたり、唐僧を望著めて目を細くし嬉笑ふ體なれば、行者大いに怒り、大眼を見張り牙を一蹉せて睨みければ、婦人ども大いに恐れ、轉つ倒つして逃げ入るを、行者腕を伸べて老婆を搔摑み扯住めければ、老婆謝びて曰く、我湯を焚いて長老に與ふるとも腹痛治る事なし、和尙先放し給へ、其解を說聞かせ申さん。行者聞いて漸々手を放し、ければ、老婆が曰く、這里は是西梁の女人國にて、這一國悉く女人のみにて男子なし、故に和尙等を見て歡喜び申すなり、那河を子母河といへり、又王城の外に迎陽館の驛あり、驛門の外に

泉あり、號けて照胎泉と云ふ、此里の人、年三十以上に及べば那河水を飲み、然して後忽ち肚大いに痛む、是則ち妊娠する印なり、扨三日を過ぎて那照胎泉に到り影を寫すに、双影有るを見れば孩兒を降生に定まりぬ、今長老等那河水を飲み給ひ、肚痛むは、是胎氣ところなり、日あらずして孩兒を生み給ふべし、怎麽ぞ熱湯のよく治す處ならんやと語るにぞ、三藏聞きて大いに駭き、已に斯のごとくならば怎とすべきと肚をおさへて泣き悲む。獃子も仰天し、我們男の身にて子を妊み、那のよりか生むべきと惘れ惑ふ。行者笑つて曰く、古人いへる言あり、瓜熟すれば自ら落つると、臨産の節に至つては脇下より裂けて産れ出でなむと云ひ慴せば、八戒聞きて筋なえ骨拔けて、恐れ慌て、罷了々々、死了々々と泣きわめきければ、沙僧笑ひて曰く、二哥々あまり腹をしめる事勿れ、腸を錯ひ胎前の病を做さん。獃子盆々泪を流し、行者を拜みて曰く、師兄這老婆に問うて、近里に手の輕き穩婆があらばやとひ來らせ給へ、今痛み緊しく一食一陣肚の塊動くは摧陣疼ならん。三藏が曰く、婆々這里に醫家はなきか、あらば行きて一帖の墮胎藥を買ひきたりて我に服さしめ、胎を打下し得させよと請ふに、老婆が曰く、迚も藥にて墮胎すろ事なし、但し這正南に一座の解陽山破兒洞と云ふ處あり、洞裡に一個の落胎泉あり、那

井裏の水を汲み來りて一口飲まば能く胎氣を解き下す、されども今は輙く取りがたし、其ゆゑは、向年如意眞仙といふ人きたり、那破兒洞にきたり住み、名を改めて聚仙庵と號し、落胎泉を護りて敢て輕々しく人に與へず、若水を要めんと欲する者は、美酒果盤を捧げ、志誠に拜し要むれば一碗の水を賜ふ、今看る長老們は只是行脚の僧、何ぞ許多の錢財を出し供物を買ふ事を得ん、只命を待ち時を俟ちて生産し給へと說くを聞き、行者滿心歡喜び又問うて曰く、這里より那解陽山迄は幾程の路程あるや。婆々が曰く、三千里に餘れり。行者が曰く好了々々、師父心を放し老孫が水を取りきたるを待ち給へとて、老婆に請うて一の瓦鉢を把り草舍を出で雲を縱つて去りければ、老婆大いに駭き、這和尚雲に駕る事を會したりとて禮拜し、是より三藏師徒を活佛なりと尊び、前の婦人を呼び出して禮拜させ、湯を焚き飯を調じてもてなしつゝ介抱しけり。斯くて行者は、少頃に解陽山に到り、雲頭を按りて觀看に、背陰所に一所の庄院あり。依て進み至り見るに、一人の老道士綠茵の上に坐し居たり。行者瓦鉢を放下き禮をなすに、道士問うて曰く、汝は那方より來れる者ぞ。行者が曰く、貧僧は東土大唐の者なり、欽差を奉けて西天に赴き經を要めんとす、然るに師父誤つて子母河の水を飲み、肚疼みて禁じがたし、曾て土人

の說ふを聞けば、是胎氣を結成りとぞ、又寶山に落胎泉ありと承り、特きたつて如意眞仙に拜謁し、些の水を求め師父を救はんとす、願はくは眞仙の所在を指引へ給へ。道士咲うて曰く、此所就ち破兒洞と云ひしが、今改めて聚仙庵と號し、我那如意眞仙の徒弟なり、汝は名を何と稱ぶや。行者答へて曰く、唐の三藏の大徒弟孫悟空と申す者なり。道人又問ふらく、汝紅酒禮那里に有りや。行者が曰く、我們は是行脚の僧一物をも貯へず、只些の水をこひ要めんとす。道人咲うて曰く、我が老師父此靈泉を護住りて輕々しく人に送與らず、汝回り去つて禮物を辨へきたれ、さもなくば通報しがたし。行者おし返し、先入りて老孫が名を說へ、眞仙かならず禮物を貪らず、一井の水を盡しても我に贈らん。道人此一言を聞きて憫れかへり、走り入りて斯くと報じければ、眞仙一度孫悟空が名を聞きて勃然と怒り、素服を脫いで道衣を穿ち、手に一把の如意をとり、庵門を跳り出でゝ曰く、孫悟空何里に在りやと叫ぶ。行者急に禮をなし、貧僧卽ち孫悟空なりとこたふ。眞仙眼を瞋らして曰く、汝が師父は唐の三藏とや、然らば汝路上に聖嬰大王に會ひたる事あるべし。行者が曰く、他は火雲洞の紅孩兒といふ潑怪なり、先生何の爲是を問ふや。眞仙が曰く、他は我が舍姪なり、我は是牛魔王が舍弟なり、前に家兄音信れ來りて我に告げぬ、唐

の三藏の徒弟孫悟空といふ潑猴、我が兒を害せりと、是に依て我汝をたづれ仇を復さんとおもふ事久し、何ぞ唐僧が胎氣を解くべき神水を與ふべきと罵りぬ。行者笑うて曰く、先生差れり、汝が舍兄は就ち我と結拜弟兄なり、又那舍姪は正果に皈して觀音菩薩に隨ひ善財童子となれり、何ぞ我を恨むる事あらん。眞仙益々怒つて曰く、這潑猴何ぞ多言なる、我が舍姪獨稱して王となるは潔し、人の奴と成りて何の好事かあらん、我が這如意を喫へとて、行者をめがけ擊つてかゝる。孫行者も暴燥し鐵棒を輪して鬪ふ事十餘合。其棒滾々として流星のごとくなれば、眞仙筋力勞れ如意を抱いて山へ敗げ登る。されども行者是を趕けんとせず、却つて庵內に入りて水を尋れんとす。然るに前の道人早く庵門を闔しければ、行者手に瓦鉢を拿ちて門前に走り至り、金脚を上げて門を蹋破り進み入るに、那道人井欄の邊に立ちて井を守りぬ。行者棒を上げて道人を擊たんとすれば、道人戰々兢々逃げ退く。其間に行者は吊桶を尋れとり、已に水を汲まんとする折しも、眞仙又走りきたり、如意を把つて行者が脚を引かけて打跌す。行者急に爬れ起き棒を使つて擊たんとすれば眞仙早く逃げ退く。又水を汲まんとすれば、他又走りきたつて行者が脚を引跌す。行者大いに焦燥ち、左の手に棒を輪し右の手に吊桶を振つて水を汲まんとするに、眞仙また走

り寄つて行者が脚に如意を鉤けて引跌す。此時行者おもはず索子を手放しければ、吊桶は索子ともに井中へ落ち込んだり。行者大いに怒り、棒を輪して擊たんとすれば眞仙早く逃げ去つて敢て敵せず。玆に於て行者暗想しけるは、已に吊桶を落したれば水を汲む事能はじ、よし水を汲まんとするも他又きたつて妨げなん、一旦回り幣手を呼びきたり水を取らんと、就ち雲頭に跳りあがり、徑に村舍に回り見るに、三藏疼痛に堪へず呻吟き、八戒嚷き叫ぶ聲たえず。行者裏に走り入り、三藏に向ひ前の條を說く事一遍し、此般は沙僧と俱に謀を設け水を取りきたり候はんと云ふに、三藏泪を流して曰く、汝們兩人那山へ往かば、我と八戒は誰有りてか伏侍せん。主の老婆が曰く、羅漢、心を放し給へ、我等よく伏侍せん。行者が曰く、汝們女流の輩、恐らくは師父を穢し辱しめん。老女が曰く、我が家總て四五口、皆幾歲年紀風月の心なし、肯て羅漢に迫り辱めじ、もし長老們第三家に到らば皆年少の者のみにて放ち去らしめず、一定交合せん事を要めん、假へ不從とも命を害するに至り申さん。行者聞きて幾に心を放し、老婆に吊桶と繩とを要め、沙僧と俱に雲に駕りて去りけるが、半時ばかりにして解陽山に至り、雲を按下て徑に庵の外に至り、行者、沙僧に示しけるは、汝は一邊に躲著、我が眞仙と交戰ふ機に乘じ、汝庵裡に入りて水を汲み

取りて去れと令し、其身は棒を掣げ門外に進み、門を開けよとぞ叫びける。如意眞仙大いに怒り、潑猴又きたりて我が神水を偷まんとするかとて、如意を揮つて擊つてかゝる。行者棒を使うて受架め門外にて挑み戰ひ、一歩二歩と繰引にし遂に山坡の下まで釣り出して戰ふにぞ、沙僧時分はよしと吊桶を提著げ門內へ進み入るに、那道人井を守りて汲ませじと支へければ、沙僧、吊桶を放下て寶杖を把つて道人が左の肩を强く打ちければ、大いに怕れ逃げ去りけり。沙僧早く吊桶をとつて井中に下し、滿々と汲み取り、庵門を走り出で雲に跳り上り、高く呼んで曰く、大哥々々、われ已に水を汲み得たり、今は其者を饒し回り給へ。行者聞いて大いに歡び、眞仙に對つて曰く、師弟已に水を取り去れり、因て且く汝を饒さんと。眞仙大いに怒り、如意を以て行者が脚を鉤け跌さんとす。行者閃と身をかはし、一交に如意を奪ひ取り折つて兩段となし、又拿つて四段に折り、擲つて曰く、潑業畜是にても猶兀禮せんやと罵りければ、妖仙戰々兢々頭をかゝへて逃げ去りぬ。行者呵々と咲ひ、雲に跳り上る。正に是有レ詩證とす。

眞鉛若レ鍊須二眞水一　眞水調和眞汞乾
眞汞眞鉛兀二母氣一　靈砂靈藥是仙丹

嬰兒枉結成胎像　土母施功不等閒
推倒傍門宗正教　心君得意笑容還

斯くて行者、沙僧、眞水を得て喜々、徑に村舍に回りきたるに、那獸子肚を膨者へて門に倚りかかり喚き居たり。行者戲れて曰く、獸子何時占房るや。八戒泣いて曰く、哥々戲をいふ事勿れ、怎水を取りきたれるか。沙僧が曰く、已に取り得て來れりとて房内に入れば、八戒も匍匐ひて裡面に入る。三藏、兩個を見て、徒弟快く水を飲ませよといふにぞ、老婆花磁の盞子を取り出して行者に渡せば、就ち半盞汲みとりて三藏に進む。三藏一口を飲み下し、些人心つきたり。八戒が曰く、我は盞子より吊桶ぐち飲み下さん。婆々大いにわらひ、和尙此水を悉く飲み盡さば、腸子も肚子も總て化け盡し忽ち死せんといふにぞ、獸子大いに駭き、又盞子を請うて僅に半盞を喫ひ終る。少時有りて三藏、八戒ともに腹中絞り痛み、只聞轂轆々々と五六陣腸鳴りて、獸子は堪へかれ大小便を席上に垂れ流せば、三藏も靜所に行かん事を要む。行者が曰く、師父猥に風地へ出でたまふな、恐らくは風邪に冒され、產後の疾を弄き出さんと。左右するうち兩個とも肚子の疼痛住り、漸々に腫脹も消し、血團、肉塊と見えしも化けたれば、始めて生に皈りたる心地し歡喜ぶこ

と限なし。老婆は此裏に白米粥を煎きて兩個に進め、長者們產後にて肚すべて力なからん、是を喫して虛を補ひ給へと云ふ。八戒が曰く、粥もよしと雖も先湯を燒きて洗個澡させよ、而して後、粥を喫はん。沙僧が曰く、哥々必ず洗足すべからず、坐月子の人湯を弄はゞ、斷然病を生ぜん。八戒が曰く、然らず、我は誠の產ならず、只是小產なれば苦しからじ。老婆聞いて大いにわらひ、則ち湯を焚き、兩個に與へて手脚を淨めしむれば、三藏悅び、白米粥を兩盞食したり。八戒は是に引かへ、十七八盞を喫ひ猶飯をも喫せん事を要む。行者憫果て、汝產後に斯くまで大食せば沙包肚の病を得べしといふにぞ、八戒已む事を得ず箸を收めけり。時に主の老婆、三藏に向ひ、願はくは殘れる水を我に賜はらんやと請ふ。三藏が曰く、我に有りて旡益き水なれば心に任せ給へといふにぞ、老婆大いに悅び、吊桶に殘れる水を瓦罐にうつし、後邊の地下に埋み貯へける。是をもて見れば、如何さま得易からざる眞水とはいられたり。斯くて家裡の女幸ひにして水を得たるを歡喜び、齋飯を整頓へ四衆をもてなしければ、師徒大いに悅び、共夜は一宿し、次の日旅裝を調へ、老婆に厚く禮謝し村舍を立出づる。誠に行者が功勞にて鬼孕をまれかれけるは、正に是、

洗淨口業身乾淨　銷化凡胎體自然

是より四衆また西を望んで走る。畢竟那(いづく)の地方にいたるや。追つて次回を發兌するをまちて分(し)解(り)給ふべし。

新訂西遊記　上卷終

學生文庫第六編

明治四十四年八月廿九日印刷
明治四十四年九月五日發行

新訂西遊記上
定價金參拾錢

不許複製

校訂者　大町桂月
東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
發行者　加島虎吉
東京市芝區新錢座町十番地
印刷者　齋藤仙吉

發兌
東京市日本橋區本石町三丁目　電話本局三六六六番二一六七番　振替貯金口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區住吉町二番地　電話浅花五八四九番　振替貯金口座東京一九八四二番　至誠堂小賣部

（印刷所　近藤活版所）

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍總クロース船來上等特製美本
全部壹百冊　定價各冊金三拾錢　郵税各四錢

發刊主旨

古典的知識は人の學徳の刻苦に在れど能く古典を深く研究し亦自らの時代に適する新古典を選擇せざる可からず桂月先生は文學の大町桂月先生は文學の大家にして古今の文學に通じ特に古典の研究に深く其の新古典の選擇に於ては一生の心血を注ぎ校訂を加へ解釋を附し以て精確周到なる印刷を施し最も鮮明なる活字を用ひ裝幀は堅牢にして價格は極めて低廉なる本書は二十冊に過ぎざるも其の大意は之を一見して了解し得るの便あり

既刊書目

1 南朝史傳 全	2 益軒十訓 上	3 日本外史 上	4 謠曲全集 上	5 曾我物語 全	6 西遊記 上	7 源平盛衰記 一	8 太平記 一	9 心學道話 全	10 常山紀談 上
11 日本外史 中	12 益軒十訓 中	13 先哲叢談 全	近刊	平家物語 上	源平盛衰記 二	狂言記 全	義經記 全	大岡政談 全	一休頓智譚 全

以下續々請手中

發兌　東京市本石町　至誠堂　振替東京四七一

新譯漢文叢書第一編　大町桂月先生譯評　（二十五版）

○新譯日本外史

袖珍天金箱入特製　紙數壹千貳百頁　特價金壹圓貳拾錢　小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の擊恍として机上に起る成敗の跡火を見るが如く大義爲めに明らかに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文敍事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し文部省所定の假名遣に依り小學兒童にも容易に讀むを得せしむ嗚呼外史は斯くて永遠に復活すべし難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまでも遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極む觀殊に奇一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閑却して自ら實を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第二編　友田宜剛先生評解　（六版）

○新譯評解文章軌範

袖珍天金箱入特製　紙數壹千壹百頁　正價金壹圓拾錢　小包料金八錢

◉東京朝日新聞評、文章軌範を普通の日本文に譯し（本文悉くゴシック五號活字を用ふ）更に平易の口語文に通解し別に又語釋を施し文の構造法を説明し上欄に原漢文を掲げたり文章軌範評解の書として最も初學者の通し易きものにして從來漢文の研究書たりし文章軌範は明治の日本文を習ふものゝ研究書となれり著者は文章教授上に一見地を具せる人斯人にして斯書あるは世人の期待に負かずと云ふ可し

新譯漢文叢書第三編　濱野知三郎先生註解

○新譯　孟子　（附索引）

袖珍天金箱入特製　正價金九拾錢
紙數八百頁　郵稅金八錢

◎讀賣新聞評、孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄には五十首に基く索引を添へ書中の一語を知るときは直に其全文を求め得るの便に供したり……其和譯の正當なる註釋の穩健にして平易なる世に貢獻する所少なからざるべく殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なる支那文學中推して第一位に置くべきもの青年子弟の讀物として最も現代に適切のもの……此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりも愉快とせざるを得ず

新譯漢文叢書第四編　大町桂月先生譯評　（再版）

○新譯　日本樂府

袖珍天金箱入特製　正價金五拾錢
紙數三百三十頁　郵稅金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生譯されし日本外史を譯せられ今又頼山陽の詠史日本樂府を譯するのみならず之を釋し之を評せらる徹底の見老熟の筆明快を極めて渾然として桂月一流の名文となり朗誦すべく尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨步せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ以て日本歷史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし日本男兒之を讀まば必ず案を拍つて起たん

新譯漢文叢書第五編　大町桂月先生譯評　（再版）

○新譯　日本政記

袖珍天金箱入特製　正價金八十錢
紙數六百廿餘頁　郵稅金八錢

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を說き、後に日本政記を著はして朝廷施政の大綱を明にせり。先頃喧騷を極めたる南北朝問題の如きも、翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手删して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大、文章雄健、光鉞陸離として、實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤譯甚だ多し。大町桂月先生之を聯譯せられ、一々精密に誤譯を正し、難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる警評を隨所に加へて筆力縱横、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編　久保天隨先生譯評　（三版）

○新譯　十八史略

袖珍天金箱入特製　正價金九十錢
紙數七百頁　郵稅金八錢

上下四千餘年、興亡八十餘朝、支那歷史の殆んど全體は、十八史略の一書に因りて、その大概を領知すべし。加ふるに、この書は、譯者が特に意を用ゐしものにして、妥當穩健、復た一字一句も苟もせず。卷中に挿入せし數百條の評語も悉く奇警峭拔、言外の微旨を闡明して、剩すところなし。敢て江湖の一讀を勸む。

新譯漢文叢書第七編　友田宜剛先生評解　全七冊縮刷全壹冊

○新譯評解　續文章軌範

袖珍天金總クロース特製紙數壹千頁　正價金壹圓　郵稅金八錢

續文章軌範は正文章軌範と並んで作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文を放てり文に志す者は必ず之を坐右に致して日夕に師とし友とすべし本書は作文教授の泰斗友田先生が刻苦研鑽多年の螢雪を積んで之を完全なる明治の作文模範化せられたるもの其異彩特長正篇と相同じく作者略傳、解題、大意、語釋文法、通解、總評、新式活字ゴシックの譯文、上欄の原文何れも燦然として光を發ち、正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し實はくは江湖の諸彦一書を坐右に備へよ

新譯漢文叢書第八編　大町桂月先生譯評　全五冊縮刷全壹冊

○新譯　國史略

袖珍天金總クロース特製　目下印刷中

萬世一系の天皇を戴けるを知らず三千年の金甌無闕の歷史の實質世に生れながら神州に生れ人心輕佻浮華なりしを知らず人心輕佻浮華なりしを慨すること尊王愛國の精神失せて士氣銷磨せんとする科書は唯歷史の骨組のみあり肉なく血なし歷史教育の宜しきを得ざること大町桂月先生の日本政記日本樂府を譯されし古來の諸國史略は大なる所あり先に日本外史を譯し國史略を開國史略創めて篇を第行の幸に拔き要を取りて日本全史として最も國民的なること既に定評あり今又國史略を譯し之を解し更に適切なる批評を加へて有益なる實質

なとりをすに筆を誦せ時にら當れたるめに係ら樂第行幸に結びたるに作者の精神を隙とするに足る二十年前迄は閑却されん戶

266
424

100725-001-0

特63-613

西遊記

大町　桂月／校

上

M44, 45

DBX-0019